



愛媛県立今治西高校に赴任したのは、31歳の時で

す。同校に対するイメージは「優秀な生徒が集まる学校」。転勤が決まった時は、自分の授業が通用するの不安でした。

実際、生徒の質問は鋭かった。前任校までは「教える準備」をすればよかったのですが、ここでは質問を予測しなければならぬ。私が問題を解いて、少しでも引かかったところは、確実に生徒は授業で突いてきました。最初のうちは正直、教壇に立つのが怖かったですよ。

私は日々の授業に精一杯でしたが、私より2年早く赴任した大内洋一郎先生は、文武両道で知られる伝統校に大胆なテコ入れを試みていました。先生は、「生徒の潜在能力を考えれば、もっと大きな成果が得られる」と、生徒と教師の意識を高めるためのさまざまな取り組みを行っていました。例えば、受験を間近に控えた3年生が、自身の体験を2年生に語る進路座談会、教科団が一体となって開発した家庭学習プリントなど、当時の先進的な取り組みとして、

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

すべては授業から。 未熟な私が信じ、 歩いた真実の道

愛媛県立松山北高校 矢野裕房 YANO HIROFUSA

仕事は楽しいことばかりでなく、悩み、苦しむこともたくさんある。

また、職業人としての成長の速度も人それぞれだ……。

言うまでもなく、それは教師という職業にも当てはまる。

初めて教壇に立った日から、社会人ゼロ年生としてゆっくりと育っていく。

偉大な先輩との出会いの中で、たくさんの方の気付きを得て、

そして同時に、たくさんの方の悩みや苦しみも得ながら……。

ひとり立ちへの日々を愛媛県立松山北高校の矢野裕房先生が振り返る。



● おおうち・よういちろう 数学科。松山南高校、今治西高校、松山北高校などに勤務。進路指導で中心的役割を担う。09年度より上浮穴高校の教頭に。
● やの・ひろふさ 化学科。伊予高校、内子高校に勤務した後、今治西高校へ。同校で9年間勤務。その後、松山北高校へ転任。4年目を迎える。

先輩教師の言葉

授業は真剣勝負 その積み重ねが 生徒と学校を変える

愛媛県立上浮穴高校教頭

OUCHI YOICHIRO 大内洋一郎



私が今治西高校に赴任したのは38歳の時。確かに地域ではトップの高校だけれども、もっと上を目指せるはず。そう感じました。生徒と教師の間にあった「自分たちは、このくらいレベルだろう」という意識を変えたかったんです。いくら優秀な進学校の生徒でも、手を掛けなければ伸びないし、手を掛けた分だけ確実に伸びます。私は、それまでの生徒任せの校風を変えるために、まず遅刻欠席指導から始めました。理由もなく学校を休まない、毎日家庭で勉強する。そういう当たり前のことから始めた学年が、東京大、京都大の合格者数の記録を塗り替えたのです。

矢野先生の授業はとにかく実験が豊富。進学校であれだけ理科の実験をして、入試でも実績を上げるのはすごいと思います。

『VIEW21』にも取り上げられていません。実際、大内先生を中心とした改革はすぐに効果をもたらし、大内先生の赴任3年目には東京大・京都大合格者数が過去最高を記録しました。

でも、正直に言えば、30歳を越えたばかりだった私は、大内先生の取り組みのすごさを本当には分かっていなかったと思います。教師が個人芸だけでなく、進路課を中心とした組織として情報を共有し、集団で生徒に向き合っていく。その意味が理解できるようになったのはそれから3、4年経ってからです。その頃になってやっと、大内先生の取り組みを見ても、「自分ならこうしてみたい」と考えられるようになりました。

ただ、「教師は、生徒に自分の担当教科を嫌いにさせてはダメだ」という大内先生の言葉は、若かった私にもよく理解できました。「好きになれば生徒は自分で勉強する。自ら学んだ1時間と、教師から教わった1時間では、どちらに価値があるかは明らかだ」。大内先生のこの考えに、「理科を嫌いにさせない」ということを教師になって以来の目標としていた私は、大いに



撮影◎愛媛県立今治西高校にて

共感しました。

生徒に模試を受けさせたら、自分も問題をすぐに解いて、生徒の関心が高いうちに授業で解説する。家庭学習の課題は漫然と与えるのではなく、この問題を解いたら次はどの問題を解かせるべきか、実力養成のストーリーを描きながら問題を厳選する。大内先生が実践していたことを、とにかく私もまねしました。一方で、化学担当の私は、実験で生徒の理解を促すことを重視していましたが、今治西高校でもそのスタイルを貫きました。実験・観察をたくさん体験させながら、難関大に合格する学力を付けることができるという自信を、今治西高校



実験で生徒の理解を促すことを重視していましたが、

で得ることができました。

高い教科指導力を持つ教師の周りには、いつも生徒の姿があることも、大内先生が証明してくれました。大内先生に質問したくて生徒が集まり、先生は彼らから情報を集め、それを授業で生徒に還元します。生徒が授業のどこでつまずきそうになっているか、どんな大学・学部に関心を持っているか。授業力がある先生には、生徒がさまざまな情報を持って集まり、その情報が更に次の生徒を集めるのだ。大内先生が生徒と、そして先生を慕って進路室を訪れる多くの卒業生と話す様子を見てそう感じたものです。

もちろん、ほかの教師も耳を傾ける。大内先生のさまざまな学校改革も、授業で生徒の心をつかんでいくことが土台にあったのではないかと、今の私は理解しています。

しかし、私がそうだったように、若い頃は近くに素晴らしい先生がいても、そのすごさを真に理解することは容易ではありません。先輩のすごさが分かること、それ自身が教師としての成長の証しかもかもしれません。だから、自分とは違うやり方をしている先生がいいたら、なぜそうするのかよく考えてみる。そして、それでも分からなければ、とにかくまねをしてみる。それが、教師としての自分を育ててくれる恩師との出会いにつながるかもしれません。



大内先生の取り組みを自分なりに咀嚼できるようにしたのは、実は、今治西高校での授業に自信が持てるようになった時期とほぼ同じなんです。授業を通じて生徒をより理解できるようにになったから、学校全体のこととも考えられるようになったのかなあと思っているんです。



今、若い先生を見て感じることは、入試の過去問題や模試の問題をもっと解いてほしいということ。生徒が模試を受けた翌日に、模試の問題を受けた翌日には当時では当たり前でした。問題を解く時に、「あの生徒ならここまでは理解できるはず」と生徒の顔を思い浮かべながら解いてみる。同様に、入試の知識ももっと身に付けてほしい。そして入試科目や配点を見る時も、「この入試で一番力を発揮できそうな生徒は誰だろう」と考えながら見ていく。いつも生徒の顔を思い浮かべてみる。それが大切だと思います。

私と同じように、矢野先生は「生徒に自分の担当教科を嫌いにさせない」ことを課していました。教師としての信頼は、授業でこそ得られるもの。だから教師にとって一番大切なのはやはり授業です。矢野先生のように、苦しいことから逃げずに、1時間1時間の授業で生徒と真剣勝負をする教師が集まれば、学校は変わるのです。

※プロフィールは取材時(09年7月)のものです。

自立を

支える

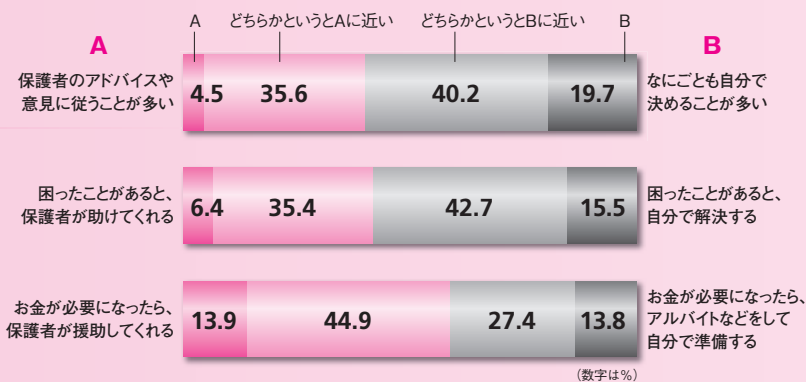
学校

と家庭

の連携

保護者は子どもへの関与を強める一方で、進路選択を「子ども任せ」にしてしまうことが多いと聞く。学校は、保護者とのように連携していくことが、生徒の自立を支えることに結び付くのだろうか。現場教師による座談会と学校事例を基に考える。

保護者との密着度が高い今の大学生



Benesse教育研究開発センター 「大学生の学習・生活実態調査報告書」(2009年3月)
調査対象○18~24歳の大学1~4年生 有効回答数○4,070人

保護者のアドバイスに従い、困った時には助けてもらう大学生は**4割**に上る。金銭面では、**6割**の大学生が保護者の援助をあてにしている。調査結果からは、大学生になってもあまり自立できていない様子がうかがえる。

「保護者向け

進路勉強会」で、 現状安住志向を打破

現状に満足しがちな保護者の意識を変えようと、埼玉県立川越女子高校は、保護者を対象とした進路勉強会を年2回開催し、学年に応じた情報提供をしている。

「目指す川女に合格！」 高校入学に満足する生徒と保護者

埼玉県立川越女子高校は、約100年の伝統を誇る県内屈指の進学校だ。県内の女子中学生があこがれる高校の一つであり、通学に不便な地域からでも同校を目指す生徒は少なくない。それだけに、合格しただけで満足してしまう生徒が多く、生徒の意欲向上が最大の課題と、進路指導主任の伊藤彰男先生は話す。

「学校行事や部活動は楽しく、人間関係も良いために、生徒は『楽し

く充実した高校生活を送ることが第一」という気持ちが強いのと思えます。大学受験においても、たとえ合格すれすれの学力であっても自分の可能性にかけて挑戦をしよう、という意識は希薄です。そのため、生徒の意識をいかに高校卒業後に向けさせ、上を目指すように刺激を与えるかが、進路指導上の大きな課題です」

保護者も生徒同様に現状安住志向である。「川女に入れば安心」「親としての責任を果たした」という意識が強く、楽しく学校生活を送る子ど

もの姿を見るだけで満足してしまう保護者が多いという。大学進学に關しても「学校にお任せします」という姿勢で、「合格できる大学ならどこでもよい」「プレッシャーに弱いので、あまり無理をさせないでほしい」と言う保護者もいる。

子どもの将来を「学校にお任せします」という保護者は、受験が近くとおろおろしてしまい、子どもに余計な動揺を与えてしまう場合が多いという。また一方では、子どもが「生物学を学びたい」というのに、「農学部はやめてほしい」などのよ

「川女はゴールではない」と 保護者に強く意識させる

うな偏ったイメージで学部・学科を判断している場合もあるという。保護者には、大学や入試に対する正しい知識を持ってもらい、学校の指導方針と同じ目線で生徒を支援してもらうと共に、生徒には、更に上を目指す意識を持たせるような働き掛けが必要だった。

現状安住志向の保護者に対して正しい情報を提供し、進路の関心を高

埼玉県立川越女子高校

◎教養と基礎的知識・技能を身に付け、自主自立の精神に満ちた人間の育成を目指す。07年度の現役合格率は77%。自学自習を重視し、学習室はほぼ1年中開放している。06年度にSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受け、全校体制で事業を推進中。

設立 1911(明治44)年

形態 全日制/普通科/女子

生徒数 (1学年) 約360人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は東北大、筑波大、埼玉大、お茶の水女子大、東京学芸大、一橋大などに92人が合格。私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1055人が合格。

住所 〒350-0041 埼玉県川越市六軒町 1-23

電話 049-222-3511

WEB PAGE <http://www.kawagojoshi-h.spec.ed.jp/>

めようと始められたのが、「保護者のための進路勉強会」だ。1、2年次では各2回、3年次では1回、保護者に学校に集まってもらい、時期に応じて、生徒が置かれた状況と課題を伝える。

1年次の進路勉強会は、5月上旬と2月下旬に開く。入学して1か月後に行う5月の勉強会では、進路指導の方針を伝え、生徒が入学直後に陥りがちな状況を示し、そうならぬように注意を促す。最も強調するのは、中学時代に成績が上位でも、高校では下位に甘んじることがあるという点だ。最初の定期考査で思うような結果が得られなくても、子どもの気持ちが折れてしまわないよ



埼玉県立川越女子高校教頭
新井良二 Arai Ryoji
教職歴31年。同校に赴任して2年目。「生徒の可能性を広げられる学校をつくりたい。」



埼玉県立川越女子高校
伊藤彰男 Ito Akiyo
教職歴32年。同校に赴任して11年目。進路指導主任。「生徒の隠れた能力を引き出した。」

う、保護者に支援をお願いする。

また、この勉強会は、保護者に「川女はゴールではない」ということを強く意識させる場でもある。その年に卒業した3年生の大学進学実績を示し、学習習慣の確立や基礎学力の定着の重要性を訴える。

1年生2月の勉強会では、入学後の生徒の様子、見え始めた課題などを伝える。「部活動にのめり込みすぎている」「家庭での学習習慣が身に付いていない」といった課題を整理し、2年生に向けて軌道修正を図るように促す。子どもは楽しく高校生活を送っていると伝えて安心させつつも、中だるみに陥らないよう気持ちを引き締めってもらうことがポイントだ。

時期に応じた情報で保護者に受験の心構えを持たせる

2年次の進路勉強会は、5月下旬と10月中旬に行う。5月は、保護者に入試制度の概要を理解してもらうことが最大の狙いだ。センター試

験、個別学力試験、私立大入試、推薦入試、AO入試、それぞれの仕組みを詳細に説明する。これは保護者が最も知りたい情報だと、新井良二教頭は話す。

「受験が佳境に入ると、生徒はいや応なく神経質になっていきます。保護者が受験に対する正しい知識を持つていれば、そうした子どもの姿に動揺せずに済みますし、子どもにも落ち着いて接することができるようになるのです」

5月の進路勉強会では、2年生10月に行われる「類型選択」の告知もする。同校では3年生で文理分けを行うため、2年生の秋に行う類型選択に備えて、家庭内でよく話し合うように働き掛ける。そして、10月の勉強会で、「同じ看護学部でも、○大ならA類型（文系）でも受験可能」など具体例を示しながら説明し、志望校の入試科目に合った類型を選べるようにしている。

10月の進路勉強会では、3年生からの本格的な受験期に備えて、2年生後半からの心構えを説くのも欠か

せないテーマだ。過去のデータを基に、「校内テストで学年平均に達していれば、可能性は大きく開ける」と伝え、「3年生5月の段階で学年平均は取れるように頑張つてほしい」と呼び掛ける。

「平均点ならば、保護者に目標が高すぎるとは思われません」と伊藤先生は話す。平均以上で可能性が大きく広がると分かれば、子どもの受験にあまりかわわつていなかった保護者でも、俄然、関心が高まるというわけだ。

生徒より保護者のほうが「早く楽になりたがる」

3年次の進路勉強会は、6月の1回のみとなる。入試制度の概要、学校の指導方針などをもう一度説明しながら、「受験の最大の敵は精神的不安定である」「保護者は悠然としていてほしい」といった、受験生を持つ保護者としての心構えを強調する。

「子どもとしっかり話し合った上

で進路を決めたのであれば、あとは子どもを見守り、結果は冷静に受け止めてください』とお願いしています。子どもが家庭に求めるのは、安心できる居場所であることです。だからこそ、保護者には、最後まで温かく見守る姿勢を持ってほしい。それが子どもの安心感につながるのです」(伊藤先生)

更に上を目指す力のある生徒には、「本人が多少消極的であっても、学校としては受験を勧める」という指導方針を伝え、家庭の協力を求める。

「本校では、生徒よりも、保護者の方が『受験を早く終えて楽になりたい』と安全志向になりがちです。早く合格が決まれば、それが良い大学だと思ひ込み、安易に入学を決めてしまうのです。楽になりたい一心で保護者が妥協していたのでは、子どもにやる気を失わせるだけ。子どもが『やるだけのことはやった』と思えるように支え続けることが、保護者の役割であることを伝えていきます」(伊藤先生)

2年生後半から入試を意識し始める保護者

進路勉強会の出席率は高く、08年度の2年生5月は230家庭、3年生は256家庭と、6〜7割の保護者が出席している。進路勉強会に対する保護者の評価は高い。

「高校に入学してはつと一安心し、受験はまだ先のように考えていたので、気持ちが引き締まる思いだった」(1年生5月)、「子ども任せにしていたが、今回の勉強会で親の心構えの大切さに気付かされた」(2年生5月)、「子どもとよく話したいと思った」(2年生5月)、「1年次から毎回参加しているが、学年が上がるたびに自分自身の意識を引き締める良い機会になった」(3年生)、「大きな気持ちで子どもと接する大切さが分かった」(3年生) 保護者から寄せられた声を見ると、学校が提供する情報を通して受験生の親としての自覚が高まっています。

く様子がかがえる。かつては、ほとんどの保護者が、3年生にならないければ受験を意識しなかった。今では、1年生からの進路勉強会を通して、「受験を学校任せにしてはならない」という意識を持つ保護者が増えている。

生徒の力を最大限に伸ばす組織力の向上が課題

保護者と共に、教師の意識が変わってきたことも大きな変化だ。かつては、「勉強は生徒自身がするもので、教師が手取り足取り指導するものではない」という意識の教師が多かった。そうした教師は、ここ5年ほどで少なくなり、生徒の自立に向けて学校が積極的に手を掛けるべき、という意識が浸透しつつあるという。保護者への進路勉強会をはじめとして、学校を挙げて進路行事に力を入れてきた中で、「今の生徒は手を掛けなければ自立しにくい」という認識に共感する教師が増えたようだ。

同校には素直な生徒が多く、教師は指導しやすい反面、高校生活に満足している生徒の姿を見て、「今のままで十分ではないか」と考えてしまいがちである。転任者の研修を徹底するなど、教師の意識改革を進めているが、危機意識を共有するまでには至っていないという。

「進路実績は出ていて、部活動は活発。生徒は学校生活を楽しんでおり、すべてがうまくいっているように見えます。しかし、そこに落とし穴があるのです。生徒は『伝統校だから』という理由で本校を選んでいくわけではありません。通学圏内にあり、進路希望に合う学校だった、という理由だったのかもしれませんが、進学実績が現状以下に落ち込めば、保護者の意識はとたんに他の公立進学校や私学へと移っていく危険性が常に存在するのです。『やはり、生徒一人ひとりをよく理解し、能力を最大限に引き出してくれるのは、川女ですね』と言われるくらいにはならないければ、本校の未来はないと考えられています」(伊藤先生)

山口県立下関西高校

毎学期、「三者懇談」を実施することによって 保護者の信頼を得る

山口県立下関西高校は、進路検討会において生徒の実態を共有した上で三者懇談を行っている。保護者の学校や教師に対する信頼感を高めると共に、保護者の進路意識の向上にも努めている。

4年前から指導体制を 学年主導から全校統一へ

山口県立下関西高校は旧制中学校の系譜を引く伝統校で、毎年1000人を超える現役国公立大合格者が輩出する県有数の進学校だ。同校が進路指導体制を抜本から見直したのは、4年前。それまでの進路指導は学年主導型であり、3年間を見通した指導や、全校統一の指導体制が整っていなかった。進路行事は散発的であり、行事後に生徒の学習意欲は高まるものの、それを維持するの

は難しい状況にあった。

全校統一の指導体制ではなかったため、保護者に対する説明責任も十分に果たせていなかった。進路指導部部長の天尾昇一先生は、次のように説明する。

「学年ごとに進路指導に取り組んでいたのですが、学年や担任によって指導に差が生じ、保護者に学校に対する不信感を抱かせることになっていました。実際、『他のクラスはしているのに、我が子のクラスはしていない』『上の子の時と先生の対応が違う』といった声が、保護者から寄

せられていました。組織的に進路指導を行う体制を整え、進路指導の流れが保護者にもきちんと見えるよう、積極的に情報を発信していく必要がありました」

進路希望調査、進路検討会、 三者懇談を実施

同校では、進路希望調査→二者面談→進路検討会→三者懇談という流れを、学期に1度、年3回行う（1・2年生の三者懇談は年2回）。生徒の把握と、教師の目線合わせをしつ

かり行った上で、保護者との交流や情報発信をこまめに行う。

最大の特徴は、二者面談・三者懇談を充実させるために、毎学期、進路希望調査と進路検討会を実施し、教師の目線合わせを行う点だ。進路希望調査と二者面談により、生徒一人ひとりの希望進路や家庭学習時間、通塾状況などを把握する。これらの情報に加え、模試の成績、定期考査の成績、評定などを基にして、校長、教頭、進路指導部長、学年団が集まる進路検討会を開き、生徒をどう伸ばしていくかを検討する。

山口県立下関西高校

◎校是の「天下第一関」には「天下第一の関中たれ」「中等教育は人生第一の難関、これを克服せよ」との意味が込められ、現在も生徒の精神的支柱として受け継がれている。2005年度、進路指導改革に着手し、以降、好調な進学実績を上げている。

設立 1920(大正9)年

形態 全日制・定時制/普通科・理数科/共学

生徒数 (1学年) 約240人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、東京大、京都大、大阪大、広島大、山口大、九州大などに計152人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ365人が合格。

住所 〒751-0826 山口県下関市後田町 4-10-1

電話 083-222-0892

WEB PAGE <http://www.shimonishi-h.yasn21.jp/kyouiku/>

進路検討会を効率よく進めるために、担任はあらかじめ生徒の課題や問題点を整理し、良い方に伸ばしたい生徒、課題がある生徒、順調な生徒それぞれのリストを用意して検討会に臨む。



山口県立下関西高校校長
木村峰康 Kimura Minayasu
教職歴35年。同校に赴任して2年目。「生徒一人ひとりが、志望を実現しながら人間的に成長してほしい」



山口県立下関西高校
天尾昇一 Amao Shoichi
教職歴24年。同校に赴任して13年目。進路指導部部長。「生徒の夢が実現できる進路指導を目指したい」



山口県立下関西高校
長祥子 Cho Sachiko
教職歴25年。同校に赴任して11年目。1学年主任。「正直に生きていける生徒を育てたい」



山口県立下関西高校
合馬芳和 Gouma Yoshikazu
教職歴27年。同校に赴任して5年目。2学年主任。「他人が嫌がる仕事を率先してできる人になしてほしい」



山口県立下関西高校
福田勝伸 Fukuda Katsunobu
教職歴26年。同校に赴任して10年目。3学年主任。「生徒には感動を共有できる人間関係を築いてほしい」

3年1学期の面談までに 8割以上の生徒の志望校決定

進路検討会は、単に志望校を絞り込み、合格可能性を検討する場ではない。1学年主任の長祥子先生は、進路検討会の位置付けを次のように説明する。

「学力や適性、将来の夢など、一人ひとりの生徒の現状を把握した上で、『この生徒は実力があるのだから、東京大や京都大も狙える』『医師志望だが、適性を考えれば研究職の方が向いているのではないか』など、教師皆で意見を出し合います。10年後、20年後の生徒の将来を見据えて、そのために今、何が必要かを考えるのです」

1年次の指導は、高い志を育むことが中心となる。目標が実力より多少高くても、志望を下げるのではなく、「数学は1日2時間、家で勉強しよう」など、具体的な目標を決めて頑張らせる。また、大学を選ぶのは自分自身であることを生徒に繰り返す。

返し訴え、将来を考える意識を育てることも1年次の重要な指導だ。

2年次は、目標を持って着実に頑張る生徒と、目標が定まらず成績が伸び悩む生徒に二極化してくる時期だ。頑張っている生徒には、それを後押しするように働き掛ける。例えば、成績上位層の生徒を学年の先導役となるように声掛けをしたり、逆に伸び悩んでいる生徒に対しては、教科担当に最適な学習法や参考書などを聞き、その内容を基に面談で助言したりしている。

進路検討会で合格判定を検討するのは、3年生の12月以降。1年次からの積み重ねによって、3年生1学期の面談までに、8割以上の生徒は志望校が決まる。2、3学期の進路検討会では模試の成績などを基に、出願校を確定する。進路検討会と教師集団による多面的なアドバイス、担任との複数回の面談を通して、生徒は自分自身を客観的に見られるようになる。

「以前は、3年生後半になって、教師のアドバイスを受け入れず、思

い入れだけで志望校を決めていた生徒もいました。今は1、2年生からの面談を通して、生徒に何度も将来を考えさせるため、3年生の時点で志望がぶれる生徒はほとんどいません」(天尾先生)

自信を持って 保護者と話せるようになる

進路検討会と三者懇談を毎学期行うのは、教師の負担は大きいですが、利点も大きいと、2学年主任の合馬芳和先生は話す。

「三者懇談で自信を持って保護者と話せるようになりました。進路検討会で得た結論は、担任個人の意見ではなく、管理職を含めた学校全体の総意です。もっと高い目標を目指させるにしても、現在の志望校が学力的に厳しいことを率直に伝えるにしても、生徒と保護者にはつきり伝えられるようになりました。学校全体で生徒を見ていることが伝われば、保護者は安心するのではないのでしょうか」

進路検討会の利点には、教師間の情報伝達がスムーズに行えるようになったことも挙げられる。生徒一人ひとりの情報や、その生徒への教師からのアドバイス、入学から卒業まですべてA4判の用紙1枚に書き込み、クラスごとに管理する(図)。生徒の活動状況や志望の変化、成績の推移などを1年生、2年生にさかため、この用紙は、三者懇談の資料として、進級時には担任への引き継ぎ資料として、3年生で志望校を絞り込んでいく際の判定資料としてなど、いろいろな場面で活用されている。

**情報をきちんと伝えるため
三者懇談をメインに**

すべての生徒の検討が終わると、いよいよ三者懇談となる。

以前、三者懇談は、3年生後半の志望校を決める直前に1回行うだけだった。生徒、保護者それぞれとの二者面談は行っていたが、個別に保護者と面談をしても、教師のアドバイスが必ずしも生徒に伝わっていな

図 進路検討会議資料

1年 組 番
2年 組 番
3年 組 番

3年進路検討会議(7月)

担任用

模範試験成績推移表

模範試験	国語	数学	英語	体育		音楽		理科		2教科		3教科		志望校	
				球技	ダンス	音楽	器楽	物理	化学	生物	地学	国語	英語	数学	理科

通知表

科目	国語		英語		数学		理科		2教科		3教科		総合	体育	音楽	美術	職業	生活	特別	その他	評点	平均	偏差	
	漢文	現代文	リスニング	読解	算数	数学I	数学II	物理	化学	生物	地学	国語												英語
国語																								

2年次志望校(10月)

順位	学校名	大学	学部	学科
1	国立大	筑波大	社会学部	国際社会学科
2	国立大	筑波大	経済学部	経済学
3	私立大	早稲田大	経済学部	国際経済

2年次志望校(11月)

順位	学校名	大学	学部	学科
1	国立大	筑波大	社会学部	国際社会学科
2	公立大	筑波大	経済学部	経済学
3	私立大	筑波大	経済学部	国際経済

3年次志望校(12月)

順位	学校名	大学	学部	学科
1	国立大	筑波大	社会学部	国際社会学科
2	国立大	筑波大	経済学部	経済学
3	私立大	筑波大	経済学部	国際経済

い、あるいは生徒に伝えたことが保護者に届いていないこともあった。時には、情報が曲解されて伝わり、親子関係が悪化してしまうこともあった。生徒と保護者と一緒に面談を行った方が情報は正確に伝わるという理由から、三者懇談をメインとすることにした。

保護者に、「子どもの進路に対してもっと関心を持ってほしい」という思いもある。木村峰康校長は、近年の保護者の進路意識について次のように指摘する。

「子どもは手を掛けた分だけ育ちます。進路指導も、取り組み内容だけでなく、どれだけ教師や保護者が手を掛けているかが重要なのです。今の保護者は、手を掛けずにお金をかけようとする傾向にあります。『塾に行かせた』『進学校に入学させた』というだけで親としての責任を十分に果たしたと思ひ、子どもと一緒に考えようとは思ひないのです。

『進路は子どもに任せている』『学校に任せています』と言ひながら、出願校を決める時になつて『この大

学はダメです』と意見を言う保護者がいます。それが、学期に1回、担任と子どもと同じ場で進路について話し合えば、子どもの将来を本気で考えるようになります。子どもと真正面から向き合ひ話し合ふこと。それが保護者にとつての『手を掛ける』ではないでしょうか」

そうした話し合ひが最終的に子どもの自立を促すのではないかと、天尾先生は考えている。

「親子でしっかりと話し合つた結果、生徒自身が自分の夢や適性、能力を考えて最終的な志望を決めたのであれば、それを受け止めるのが保護者の役目だと思います。もちろん、人生の先輩である以上、アドバイスはすべきです。それを踏まえて、最終的には子どもが自分で進路を判断できる状態をつくること、子どもの自立を促すために保護者が果たすべき役割ではないでしょうか」

親子が一度に顔をそろえることによって、親子の考え方の違いが浮き彫りになることもあるようだ。3

学年主任の福田勝伸先生は、次のように話す。

「コミュニケーションが不足している親子は、三者懇談の場で初めて意見の違いが明らかになることがあります。また、親子で意見が一致しているように見えても、実は生徒の思いを保護者が過剰に受け止めて、かえつて生徒は重荷に感じている場合もあります。意見の違いを浮き彫りにすることで、親子での対話のきっかけを提供するのも三者懇談の大切な役目です」

ただ、保護者にとつて、子どもの前では話にくいこともある。その際には、保護者だけに残つてもらひ詳しく話を聞く、あるいは時間を2つに分けて、前半を二者面談、後半を三者懇談と使い分けるなどの工夫をしている。

教科指導力の向上により 保護者の更なる信頼を得る

組織的な進路指導が動き始めた今、次の課題は教科指導の充実だ

と、木村校長は話す。

「全校体制による進路指導というハードが整つた次には、教科指導というソフトの部分を、どのように組織的に改善するかが大きな課題です。今や教師個人の力だけで生徒を引っ張つていける時代ではありません。授業改善も、積極的に授業を見せ合うなど教師同士が協働して、組織的に行ふ必要があります。教師が教科を超えて切磋琢磨し、授業の質を高めていけるかどうか。それが、今後の本校の行方を左右すると考えています」

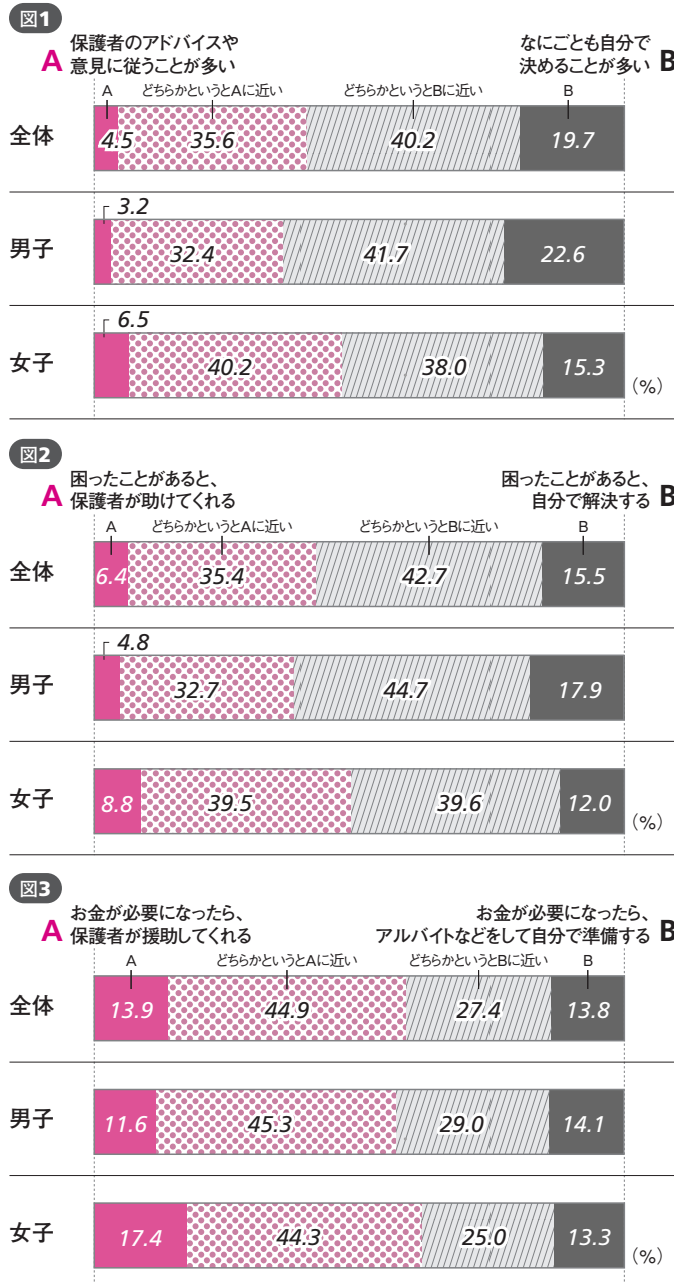
授業改善は保護者の意識を塾から学校に向けさせる上でも重要になると、天尾先生は話す。

「塾依存の体質は、生徒だけの問題ではありません。塾の指導による高校受験の成功体験があるだけに、いったん高校の授業に不安を覚えれば、再び塾に頼ろうとするでしょう。志望の実現のためには、本校の指導だけで十分であることを示して、保護者の信頼を得たいと考えています」(天尾先生)

約4割の大学生が 保護者の意見を聞き、助けてもらおう

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

図 保護者との関係 (全体・性別)



出典○「大学生の学習・生活実態調査報告書」/調査時期○2008年10月/調査方法○インターネット調査/調査対象○18~24歳の大学1~4年生(ただし、留学生、社会人経験者を除く)/有効回答数○4,070人

意思決定や問題解決を自分でする学生は6割

今号の特集は「生徒の自立」がテーマだが、大学生の自立はどのような状況にあるのか。図は、Aは保護者への依存度、Bは学生の自立度を表す指標とみなし、大学生に自分の状況に近いものを選んでもらったものだ。意思決定や問題解決の面では、Bの「自分でする」という回答が6割を占めた(図1、2)。一方、金銭面では、AとBの比率が逆転し、Aの「保護者が援助してくれる」が6割を占めた(図3)。また、女子は、男子よりも親への依存度が高い傾向にあった。

子どもを「見守る」大切さを保護者に伝え、親子の自立を促す

意思決定や問題解決を6割の学生が自分でしているという結果を、「自立」と見なせるのか。高校現場からは「大学生の4割が保護者の関与を受けているとは、自立が遅れているのではないか」という声があった。背景には社会情勢との関係が推察される。9月号の本コーナーで「日本は厳しい社会だと認識し、将来像が描けない」という今の大学生像を紹介した。これと照らし合わせて考えると、大学卒業後の経済的自立に不安があり、親を頼るしかないという意識が透けて見える。「金銭面で支援を受けているから意見を聞く、という状況なのではないか」という指摘もあった。

また、「保護者は、子どもを早く自立させようとは思っていないのではないか」という意見もあった。例えば、安全志向で志望校を選ばせるなど、子どもの失敗やつまづきを排除しようとし、それが結果として自立を阻害しているというのだ。

保護者は、自分が経験してきた時代とは社会環境が大きく変わり、子どもにどう接すればよいのか分からず、状況を把握しておきたいために必要以上に子どもとかかわろうとしていると推測される。高校としては、保護者に進路情報や学校の様子などを適宜伝えて不安を軽減させ、子どもを「見守る」ことが自立につながるのだと伝えたい。

調査の詳しい結果は Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください

ベネッセ 研究 で 検索

<http://benesse.jp/berd/>

福岡県立 ^や八幡^{はた}高校

進学実績向上

「日々の指導にしっかり取り組むことが、
学力だけでなく生徒の特性の把握につながり、
進路検討会に生きてくることを実感しています」

▶▶▶ P.20



指導変革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は
どう変わったか



岩手県立 ^{にし}西和賀^{わが}高校

進路指導改革

「『地元のために働く』という使命感を持たせることが
生徒の進路に対する意欲を高めるのです」

▶▶▶ P.28

大阪府・私立 追手門学院中学校・高校

教師の意識改革

「キャリア、教科、分掌を越え、学校の未来を語るうちに
学校を思う気持ちが強くなっていました」

▶▶▶ P.24





◎芹沢政衛初代校長が詠んだ「ちよろづの教えのもととまれ人 誠ひとつのひとすじの道」「朝夕に磨けとてこそ仰ぐなれ 心の鏡くもりなきまで」の2首の和歌を校訓とする。2006年度入試から3年連続で国公立大合格者200人を超える。現在、難関大合格者増を目指し、改革に取り組む。

設立
1919(大正8)年
形態
全日制／普通科・理数科／共学
生徒数
1学年約320人
09年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は大阪大、岡山大、広島大、山口大、九州大、九州工業大、福岡教育大、熊本大、長崎大、鹿児島大、北九州市立大などに計189人が合格。私立大には早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、福岡大などに延べ243人が合格。
住所
〒805-0034 福岡県北九州市八幡東区清田3-1-1
電話
093-651-0035
Web Site
http://yahata.fku.ed.jp/

福岡県立
八幡高校

進学実績向上

日々の指導で把握する 生徒情報を 進路検討会で生かす

変革のステップ

背景

◎立地の不利、地域の少子高齢化、理数離れなどにより、理数科を中心に志願者数が減少

STEP 1

実践

◎基礎学力の定着のための「日々課題」「口頭試問」、教養も含めた「小論文指導」などで把握した生徒情報を、進路検討会で生かす

STEP 2

成果

◎国公立大合格者が3年連続で200人を超える。各取り組みは形骸化せずに継承されている

STEP 3

**立地の不利、少子化、理数離れで
志願者数が減少**

福岡県立八幡高校は福岡県北九州市を代表する進学校だ。長年、150人前後が国公立大に進学していたが、ここ数年で大きく実績を伸ばし、2006年度入試からは3年連続で200人を突破した。中島良博教頭は、好調の要因を次のように分析する。

「本校には、泥臭いまでに真摯に生徒にかかわろうとする教師の熱意と、それを素直に受け止める生徒の気質があります。この二つが融合し、相乗効果を上げているからではないでしょうか」

実は同校は、数年前までは志願者の確保に苦しむ時期もあった。同校のある八幡東区は市内でも少子高齢化が進んだ地域であり、通学には最寄り駅からバスで10〜15分かかる。少子高齢化と立地上の不利に加え、理数離れが進んだ影響もあって、02年頃から理数科を中心に志願者が減少し始めた。

進学実績を上げて、受験生の目を向けさせた。その思いが、改革の原点となった。

**3年次に3回行う進路検討会で、
教科担当も交えて生徒情報を共有**

改革のポイントの一つは、進路指導の組織化

だ。国立大現役合格にこだわり、学校の指導だけで志望を達成させることを目標とした。放課後や土曜セミナーなどの課外学習を組織的に進める一方、1年次から個別指導にも力を入れ、粘り強い学習指導を展開した。

進路指導の在り方を一変させたのが、05年度に導入した進路検討会だ。取り組みを主導した2学年主任の内村尚俊先生は、その狙いを次のように述べる。

「過去2年間の進学実績が好調だった要因を分析したところ、3学年担任団による生徒



中島良博

Nakashima Yoshihiro

福岡県立八幡高校教頭
教職歴27年。同校に赴任して2年目。「モットーは「しなやかに、したたかに」。教育も組織運営も柔軟な根気が必要」



坂田浩美

Sakata Hiromi

福岡県立八幡高校
教職歴27年。同校に赴任して16年目。進路指導
主事。「モットーは「Nothing comes from nothing」
(無からは何も生じない)」



内村尚俊

Uchinura Hisatoshi

福岡県立八幡高校
教職歴24年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「頭ではなく心で考えた行動をするよう心掛けていきます」



浦野浩二

Urano Koji

福岡県立八幡高校
教職歴23年。同校に赴任して19年目。3学年主任。「最後まであきらめない粘り強い指導を心掛けていきたい」

情報と大学情報の共有が大きかったことが分かりました。それまでは、志望校の検討は担任の力量に頼ることが大きく、年度あるいはクラスによって合格実績に差が見られました。そこで、担任団と教科担当が徹底的に情報を共有して生徒の進路を考えていく、全学年体制が必要だと考えました」

進路検討会は3年次の8月、11月、1月に行う。参加者は、8月が進路指導部と3学年担任団、11月と1月はそれに個別学力試験にかかわる教科担当者が加わる。生徒の顔写真と成績データをプロジェクトで示しながら、志望や学力、性格、人柄などを勘案して、生徒一人ひとりにふさわしい大学・学部や、一般入試・推薦入試などの受験方式について検討する。ここで、後述する「日々課題」「口頭試問」「小論文指導」などによる生徒把握が生きてくる。

8月は、難関大を目指せる力のある生徒を見つけ、生徒の可能性を広げていくことが主なテーマとなる。「二次力より小論文を書く力がある」「日々課題をコツコツまじめに取り組んでいるから、これから伸びる」など、担任団がさまざまな情報を持ち寄り、可能性を検討する。11月になると模試の成績がそろい始め、受験時の学力もおおよそ見えてくるため、より現実的な志望校を絞り込む。志望校が学力よりも高すぎるのなら、同じような教育を行う大学、あるいは得意科目が生かせる大学・学部を探し、

面談で生徒に提示する案をまとめる。そして、1月はセンター試験の結果を受け、具体的な出願校の検討を行う。

進路検討会は、教師の指導力向上を促す場にもなっている。3学年主任の浦野浩二先生は、次のように指摘する。

「担任は生徒の各教科の学力を把握しづら
いものですが、教科担当を交えて検討することによって、生徒の教科ごとの実態や可能性が把握でき、生徒に合った志望校、受験方式や受験科目などが見えてきます。指導経験の浅い先生にとっては、検討の過程で話題になる大学や入試の情報などについて知識を深めることもできます。若手教師にとって何よりも重要なのは、検討会直後の面談に自信を持って臨むことができることです。進路検討会は、教師にとって指導力向上に欠かせない『学びの場』になりつつあることを感じます」

生徒の理解度に応じた「日々課題」を毎日課す

基礎学力や学習習慣の定着も徹底して行ってきた。その一つが、「日々課題」だ。教科書レベルの基礎的な内容を問うB5判の課題プリントで、その名の通り、毎日あるいは2日に1回程度の頻度で課す。

特に力を入れているのが数学だ。いずれの教

科も1、2年次はほぼ毎日取り組ませ、3年次に
になると回数を減らすのに対して、数学は3年
次でも「毎日」が基本となる。教室で他の生徒
の答えを写してしまうことがないよう、ここ数
年は、教室に入る前の登校時に回収している。
生徒も毎日取り組むのは大変だが、一日の最
後の授業が終わった後や、通学中の待ち時間を
使うなど、時間の使い方を工夫するようになる。
取り組むのが「当たり前」という意識になり、
学習習慣が定着していくという。

日々課題は、生徒把握にも大きな意義がある。
進路指導主事の坂田浩美先生は、進路検討会を
充実させるための欠かせないツールになってい
ると説明する。

「生徒の理解度や弱点に応じた課題とする
ため、プリントはほぼ毎日つくりまわす。確か
に手間が掛かりますが、毎日添削することで、
生徒の学力を的確に把握できる。これが、進
路検討会で個別学力試験の学力を検討する時
の重要な判断材料になります」

20問完答で合格の「口頭試問」で 基礎学力の定着を図る

日々課題の発展形として「口頭試問」も取り
入れた。教科書レベルの基礎事項の定着度を、
口頭によって確認するものだ。国語科が発案し、
現在は英語や数学、理科、地理と多くの科目で

実施する。

「口頭で即座に
答えられるという
ことは、確実に、
知識が身に付いて
いる何よりの証拠
です。口頭で理解
度を確認し、確実
な定着を促してい
ます。3年次に教
科の内容を掘り下
げるためには、1、
2年次までに基礎
的な事項を確実に
身に付ける必要がありま
す。ところが実際に
は、3年生になっても基礎
の定着が不十分な
生徒もいます。基礎基本
の確実な定着には非
常に効果的だと思います」
(内村先生)

口頭試問の内容は、国語や英語は文法や単語、
数学は公式など、教科書レベルの基礎的な内容
が中心だ(図)。生徒を順番に並ばせ、約20問
を出し、全問正解なら即座にパス、1問でも間
違えば再び列の後ろに並ばせ、20問完答でき
るまで何度も繰り返し返す。

実施時期は、例えば、国語は古文の助動詞を
終えた1年次夏休み明け、漢文を終えた2年次
秋など、ある程度まとまった単元や内容が終わ
った段階でとなる。緊張のあまり震えてしま

図 「口頭試問」問題(国語)



国語の問題の一部。上が問題、下が解説。国語科では、毎回100問
近い問題を作り、そのうち生徒1人に対して20問を出題する

生徒、最後の最後に間違えて地団駄を踏む生徒、
ようやく合格し涙を流して喜ぶ生徒など、この
時期には校内のそこかしこで悲喜こもごもの光
景が見られるという。

「雑学こそ学びの基礎」 小論文指導で生徒の意欲を喚起

進路指導の組織化、基礎基本の定着のほか、
同校の躍進を支えてきたのが、02年から続く「小
論文指導」だ。もともと入試対策として導入さ
れたものではなく、原点には「雑学こそ学びの
基礎である」という理念がある。

「以前は、3年次に入試で必要な生徒に対

してのみ、小論文指導を行っていました。しかし、小論文の前提となる知識や、それを論理的に組み立てる力がないため、3年生になってから取り組ませても満足に書けない生徒が多いのが実情でした。日頃の授業で脱線した時などに語る雑学こそが、生徒の学が意欲を刺激し、内容の深い小論文を書くための土台になるのではないかとこの意見が出され、2年次を対象に学校裁量の枠内で小論文指導を始めました」(中島教頭)

授業は「探究の時間」と名付けられた。2学年の教師が担当教科とは別に、「医療」「国際化」「メディア・リテラシー」など、自分が得意な分野の講座を担当する。生徒はすべての講座を聞き、最も印象深かったテーマに関するレポートを提出する。生徒の自主的な学びを促すために参考文献を紹介し、それを用いて作成したレポートは高く評価するなどの工夫をした。

「一つのテーマのために、十数冊の新書を読んだり、裁判所に連絡して裏付け調査を行ったりと、講座の準備は大変でしたが、自分の好きな分野であり、しかも、教科の授業とは一味違った内容に関心を示す生徒も多く、教師にとっても充実した時間でした。生徒が目を輝かせて耳を傾けていたり、おとなしい生徒が積極的に質問したりと、普段とは違う生徒の側面を知ることができたのも大きな収穫でした」(坂田先生)

取り組み同士つながりが 相乗効果を上げる

現在、「探究の時間」は、普通科3年次の「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)で行う。理系クラスでは「環境」「遺伝子技術」「医療」など、文系クラスでは「国際化」「福祉」「教育」など、教師1人につき1テーマを担当し、6クラスで各2時間の講座を実施。1時間目は概要を説明、2時間目はより内容を深めた上で、小論文(大学入試の過去問など)に取り組ませる。小論文の書き方など基礎的な技法は、1、2年次に総合学習の一部として実施する。1年次は小論文の形式や表現方法など、小論文の基礎的な書き方、2年次は書籍や新聞、インターネットなどを利用して知識を深め実践力を養う。教師全員が何らかの形で小論文指導に加わる体制となっている。

「本校では、以前から取り組む小論文指導や日々課題、口頭試問、数年前からの進路検討会、また理科の取り組み(本誌02年6月号参照)などが、形骸化せずに進んでいます。生徒の現状を踏まえながら、教師が工夫や改善を加えているからでしょう。それぞれの取り組みが有機的につながり、最終的には生徒の進路選択や成長に結び付くと、教師一人ひとりが実感しています。小論文、日々課題、口頭試問の指導にしっかり取り組むことで、

学力だけではなく、生徒の特徴や性質なども把握でき、それが進路検討会で生きてくる。それぞれの取り組みがどのようにつながっているかを意識することは大切だと思います」(中島教頭)

現役国公立大合格者が増えた今、次の課題として掲げているのは「現役難関大合格者」を増やすことだ。06年度の3年生から、放課後課外終了後に成績上位層を対象とした課外学習「難関大学ターゲット」を始め、翌年には同講座を1年次から拡大した。従来、3年次に行っていた「難関大学志望者集会」は、08年からは2年次4月に実施するなど、早期の意識付けにも力を入れる。

また、教師の指導力向上のため、九州大の入試問題分析も始めた。各教科の分析をまとめた「分析集」には1、2年生向けのアドバイスも加え、全学年で配布している。学習の指針を与えると共に、早期の意識付けを促すのが狙いだ。

「本校の生徒は、素直に教師のアドバイスを受け入れる半面、あきらめずに最後まで自分の意志を貫き通す気迫に欠ける傾向があります。教師がこれまで以上に情報を共有し、多方面から生徒を励ますと共に、私たち自身が生徒の可能性を信じ、最後まであきらめない粘り強い指導をしていかなければなりません。それができた時、本校は今以上の躍進を遂げられると考えています」(浦野先生)



◎「独立自強(じきょう)・社会有為」を学院理念として、「自律・協同・創造」の精神を有し、社会に貢献する人材の育成を目指す。2000年に学校改革に着手。難関国公立大文系・難関私立大文系を目指す英数コース、国公立大理系・難関私立大理系を目指す理数コース、関関同立はじめ私立大を目指す総合文理コースの3コースがある。

設立
1888(明治21)年
形態
全日制／普通科／共学
生徒数
1学年約340人
09年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、大阪大、和歌山大、神戸大、山口大、香川大、九州大、大阪教育大、大阪市立大などに計34人が合格。私立大は、明治大、法政大、同志社大、立命館大、追手門学院大、関西大、甲南大、関西学院大などに延べ610人が合格。
住所
〒567-0008 大阪府茨木市西安威2-1-15
電話
072-643-1333
Web Site
http://www.otemon-jh.ed.jp/

大阪府・私立
追手門学院中学校・高校

教師の意識改革

若手も参加の「学習会」で 教師一人ひとりが 学校の未来を考える

変革のステップ

背景

◎大学進学実績が伸び悩み、その影響で志願者数が減少。学校の在り方を抜本的に改める必要性を痛感

STEP 1

実践

◎6年間一貫教育を考える組織が、教師の「学習会」に発展。若手も含め、学校の将来像を話し合う組織として改革を牽引

STEP 2

成果

◎教師一人ひとりに学校改革への意識が醸成され、改革は順調に進む。大学進学実績が向上し、志願者数も回復

STEP 3

**志願者数減少の危機に直面し
教師が自信を喪失**

教師の意識啓発や一体感の醸成の必要性を感じながら、うまくいかずに悩んでいる学校は多くあるだろう。追手門学院中学校・高校は、そうした課題の解決に教師のボトムアップの「学習会」を軸に据えて取り組み、学校改革の原動力にしてきた。

発端は9年前にさかのぼる。2000年度、5年ぶりに追手門学院中学校・高校に戻ってきた佐々木実校長(当時は教諭)は、学校のあまりの変わり様に驚いた。

「1995年から5年間、学校を離れていたのですが、本校に再着任して驚きました。中学校、高校共に定員割れ。中学校に至っては、募集人員の半分程度しか生徒が入学していませんでした。5年前まではそのような兆候は見られなかっただけに、半ば茫然とさせられました」

志願者数が低迷した原因は、大学進学実績にあった。進学者数が特別に減っていたわけではない。他の私立校が実績を伸ばす中で、相対的に同校の実績が下がっていたのだ。99年度高校入試では専願志願者100人のうち99人を合格させる事態に至った。入試委員長を務める木内淳詞教頭は、当時を次のように振り返る。

「生徒募集に悩んでいた時に思ったのは、

生徒募集がうまくいかないと、どれほど良い教育をしても、教師として自信を持つことはできないということです。目の前の学校状況に、教師は打ちひしがれ、自信を失っていました」



追手門学院中学校・高校校長
佐々木実
Sasaki Minoru

教職歴25年。同校に赴任して23年目。「つまり、ことが多いが人生。「七転び八起き」の精神で、何度も立ち上げられる生徒を育てたい」



追手門学院中学校・高校教頭
吉村俊介
Yoshimura Shunsuke

教職歴・赴任歴共に34年。前学習統轄委員長。「生徒・保護者の期待に応える、質の高い教育を実践していきたい」



追手門学院中学校・高校教頭
木内淳詞
Kinuchi Junji

教職歴・赴任歴共に23年。入試委員長。「現状把握は悲観的に、行動する時は楽観的に」



追手門学院中学校・高校
表弘之
Omote Hiroyuki

教職歴・赴任歴共に14年。学習推進部長。「どんな人間も「長」短。良いところを認め、共に学び、共に働く」



追手門学院中学校・高校
谷川譲二
Tanigawa Joji

教職歴10年。同校に赴任して9年目。6年「貫教育部」。「生徒、先生とのつながりを大切に、誇りを持つ教育をしたい」

学校の将来像を考えるため 目的別に5つの委員会を発足

定員割れの打開策として、まずコース制を導入した。英数・理数・総合文理の3コースを置き、きめ細かな学習指導と難関大学合格の実現を明確に打ち出した。01年2月には、当時の土井邦孝校長の決断により、改革を企画・立案する専門組織として「教育改革委員会」を設置。傘下に、「入試改革委員会」「学習統轄委員会」「特別教育委員会」を設け、学習オリエンテーションや授業アンケートなど、新たな施策を次々と導入した（*本誌02年6月号参照）。

6年間一貫教育の構築も、改革の目玉の一つだった。中高の接続を考える「6年制委員会」を設置。佐々木校長が委員長となり、一貫制システムの整備について検討を始めた。これが後の「学習会」へと発展する。

「6年間一貫教育校としての制度整備は、学校全体の方向性にかかわる問題です。当時、本校には学校全体の将来像を描いたり、方向性を定めたりする組織はなく、必然的に『6年制委員会』が企画・推進の機能を担うようになったのです」（佐々木校長）

議論が深まれば深まるほど、将来像を描く困難さが明らかになっていった。中高一貫校としての学校像を描くからには、システム論だけを議論していても始まらない。募集戦略から学習

指導の改善、出口指導に至るまで、学校のあらゆる部分を見直さなければならぬことが分かってきた。

校内だけで話し合っているだけでは、突破口は見いだせない――。委員会のメンバーは、状況打破を企図し、2人1組となって他校を多数視察した。生徒募集、学習・進路指導のノウハウ、教師の意識などについて聞き取りしてレポートにまとめ、発表することを繰り返した。

「本校の教師の多くは、自分たちの教育に誇りや自信を持っている反面、教育成果を客観的にとらえたり、生徒や保護者、塾の先生からの評価に対しての関心が希薄でした。私自身、教師としての駆け出しの頃は、『生徒は勝手に集まってくるもの』『先輩方が集めてくれるもの』という意識がありました。生徒募集や進学実績にこだわる他校の姿を目の当たりにして、『学校を変える前に、まずは自分自身が変わらなければならない』という危機意識を強く感じました」（木内先生）

若手が発言しやすいよう 5、6人のグループで議論

「委員会に参加する10人ほどの教師だけでは、学校の将来像を描くことに限界がある」、そう感じた佐々木校長は、委員以外の教師にも自由に参加してもらうように呼び掛けた。組織の規

*バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)

教育理念の実現に向けた取り組み

追手門学院中学校・高校は、社会のニーズに合致させ、生徒が集まるような改革を進めてきた。今後は、教育の「不易と流行」の「不易」の部分に目を向け、教育理念に基づく指導に力を入れる。

教育理念「独立自強・社会有為」、教育目標「『自律・協同・創造』の精神を有し『社会に貢献』する人材の育成」の実現に向けて、09年6月には、全教員を対象にアンケートを実施し、各指導がどの理念に位置付くのかを一覧にまとめた。例えば、「生徒による週間計画の策定」＝「自律・創造」、「理科の実験」＝「協同・創造」など、学習活動が教育理念のどの部分に対応しているのかを明示し、最終的にシラバスにまとめる予定だ。佐々木校長は、「教育理念に基づく、ぶれない指導の核をつくると共に、教員文化を高めていきたい。『志願者が減るのではないか』という後ろ向きな緊張感ではなく、『教育理念をスローガンで終わらせずに、しっかり実践していこう』という前向きな緊張感を、教師一人ひとりが持てるようになる」と改革の意図を語る。

の5、6割程度に当たる30〜35人となり、議論もより熱気を帯びたものになっていた。

安定的に生徒募集を行う方法、進学実績を高めるための指導方法など、議題はさまざまだった。「学習会」の開催は18時30分〜20時が基本だったが、30分以上の延長も珍しくなかった。「6年制委員会」の時代から参加している表弘之先生は、次のように振り返る。

「『学習会』での議論を通して、他の先生も自分と同じように、学校の行末に対して不安や悩みを抱えていることが分かりました。互いに思いを打ち明けることで一体感が生まれ、方向性が定まることも実感しました」

佐々木校長は、「学習会」が改革の方針を定めるだけでなく、教師の思いを共有し、意思統一を図る場になっていたと話す。

「今でも、表先生が学習会の場で定員割れの対策のために夜遅くまで学校に残り、『生まれたばかりの子どもの顔も見られずにつらいけれども、何とか頑張りたい』と涙をこぼして決意を語っていたのを思い出します」

「学習会」の運営には工夫が凝らされた。当初は、職員会議のように一堂に会し、拳手をして発言する形式だった。しかし、若手教師から「発言しにくい」という意見が出され、変更。5〜6人のグループに分かれて議論を進め、一定時間が過ぎた後、各グループの議論を3〜5分程度で発表し、担当者が各校務分掌に持ち帰

って、新規企画の立案や修正に生かす形式にした。出された中で良い案は、できるだけ制度化するようにもした。教師の自己効力感を高め、改革意欲を喚起する工夫である。

「提案はできるだけ実現に向けて検討しました。自分の考えが形になることは、教師のやる気につながります。これにより、更に学校を元気づけたかったです」（佐々木校長）

すべての教師が当事者意識を持ってこそ学校は動く

「6年制委員会」の時代からすべての教師に門戸を開いてきた結果、若手教師が発言しやすい雰囲気となった。この財産は「学習会」にも引き継がれている。00年に赴任した谷川譲二先生は、赴任1年目から参加した。

「佐々木校長から『ぜひ参加して、意見を聞かせてほしい』という呼び掛けがありました。常勤講師で勤務1年目の私に何ができるのかと戸惑いましたが、同期の2人と『6年制委員会』に参加しました。委員会で率直に思いをぶつけ合い、学校をどうしたいのか意見を戦わせる先生方の姿に、驚かずにはいられませんでした。更には、若手の我々の意見にもしっかり耳を傾けてくれる。『マニユアル通りに業務をこなすだけの学校ではない』現場の先生方の思いが学校を動かしている」

模を拡大し、キャリア、校務分掌、教科の壁を越え、教師が学校の未来について自由に話し合う場にするのが狙いだった。

中高一貫校の1期生が高校に進学した04年度には、中高の接続についての議題はいったん解決したものととして「6年制委員会」の機能を縮小し、「6年制推進プロジェクト」に引き継いだ。これまで行ってきた学校のあらゆる機能についての話し合いの場は、隔週で開く「学習会」として継続した。その頃には、参加者は全教師

と肌で感じました。何度か回数を重ねるうちに、私も何とか発言できるようになっていきました。意見を述べる度に少しずつ自分が主体的になっていき、学校を思う気持ちが強くなっていくのを感じました」

07年には「学習会」から「若手会」が生まれ、20〜30代の教師も組織運営を経験するようになった。「難関大の合格実績を上げるためにはどうすればよいか」「生徒募集を安定させるために何が必要か」などのテーマに挑み続けている。「若手会」の提案が、取り組みの柱となった

ケースもある。「3つのサイクル学習」だ。当初、管理職は、弱点克服によって小さな成功体験を積み重ね、自己肯定感を高める学習法として、「予習→授業→復習」を徹底し、「授業→週末課題→確認テスト」という1週間単位で理解度を確認する「1週間のサイクル学習」を提案した。これに、「若手会」は新たな工夫を加えた。定期考査後に「テスト返却・解説→定期考査と同じ内容のミニ考査→フィードバック講習」という「考査サイクル」を行い、授業サイクル、1週間のサイクル学習に組み込むという内容だった。前学習統括委員長である吉村俊介教頭は、若手教師の動きを次のように評価する。

「現場の先生から積極的に意見が出されるのは、『6年制委員会』で培った下地があるからです。進学実績向上の改革に着手し始めた頃は、数人の進路のエキスパートの先生が、

その他の教師を引っ張っていけば十分だという声もありました。しかし、私たちはそうした方法は取りませんでした。すべての教師が主体的に学校運営に参加し、当事者意識を持つてこそ、活力ある学校になると確信していたからです。『学習会』や『若手会』を通して、教師は自信を持って発言し、行動できるようにになりました。教師の『育ちの場』として、本校にはなくてはならない場になっているのです」

中長期の学校像を描くプロジェクトを発足

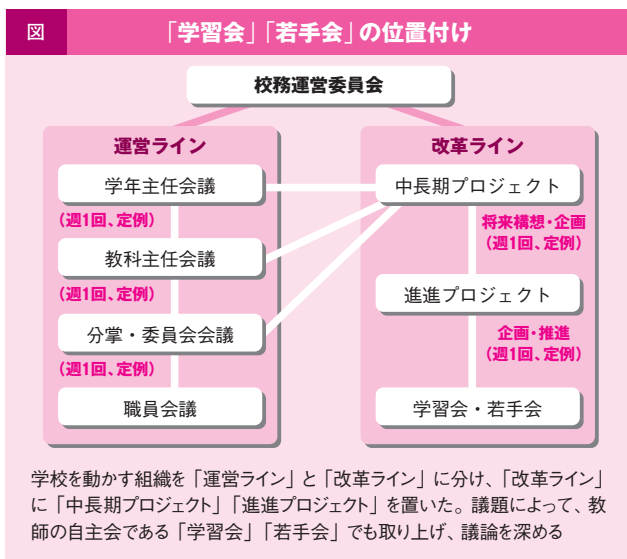
08年度には中長期の学校像を企画推進する「中長期プロジェクト」を設置し、併せて生徒の進路観の育成と高度な進学指導の両立を目指す「進進（進学＋進路）プロジェクト」を始めた。今後は、両プロジェクトの下に「学習会」を常置し、そこで出た案を吸い上げるシステムに移行する予定だ（図）。

生徒募集は02年頃から復調し、見事V字回復を果たした。進学実績も、翌年から上昇基調に乗り始め、ここ数年はコンスタントに国公立大合格者35〜45人、関関同立合格者200人前後を維持している。生徒募集も順調で、09年夏の高校のオープンスクールでは過去最多の900人の中学生と保護者が参加した。

学校全体が軌道に乗った今、醸成した教師の意識を維持できるのだろうか。

「ここ10年の取り組みを通して、どうすれば学校の組織が変わっていき、学校が良くなっていくのかを、多くの教師が経験しました。『自分一人では難しくても、皆と一緒になら出来る』という思いを、20〜30代の若手教師も含め、ほとんどの教師が感じています。この強みがある限り、教師の世代交代が進んでも、改革精神を伝え続けていくことが出来ると確信しています」（木内先生）

学校を変えるのは自分たち——。その信念がある限り改革の歩みは止まらない。



今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。2009年6月号指導変革の軌跡「兵庫県立夢前高校」、2009年4月号指導変革の軌跡「栃木県立栃木高校」など
 ▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



岩手県立
西和賀高校

進路指導改革

地元志向を高め 生徒の進路実現と 地域活性化を目指す

◎「自主独立の道行かん」を校訓とし、生徒一人ひとりを大切にし、地域活性化に貢献する学校を目指す。近年、進路指導を強化し、2009年度入試では国公立大進学者10人を達成。08年度にボート部が高校総体、東北ボート選手権大会で準決勝進出、09年度に吹奏楽部が25年ぶりに県大会に出場した。

設立	1949(昭和24)年
形態	全日制／普通科(普通コース、福祉・情報コース)／共学
生徒数	1学年約80人
09年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、弘前大、岩手大、山形大、福島大、岩手県立大、秋田県立大、都留文科大に計10人が合格。私立大は青森大、仙台大、仙台白百合女子大、白百合女子大、法政大などに延べ10人が合格。
住所	〒029-5503 岩手県和賀郡西和賀町湯田19-25-2
電話	0197-84-2809
Web Site	http://www2.iwate-ed.jp/nwg-h/

変革のステップ

背景

◎恒常的な定員割れを解決するため、隣接地域への広報活動に力を入れたが、多様な生徒が入学し生徒指導に困難を来す

実践

◎習熟度別の「分かる授業」や、地域の仕事や魅力を学ぶ進路指導を積極的に取り入れ、卒業後の進路を意識させる

成果

◎生徒の問題行動や不登校が激減。国公立大合格者、地域への就職者も増加するなど、進路指導面でも顕著な実績を上げる

過疎化と少子化で
定員割れが恒常化

岩手県西和賀町(2005年に和賀郡湯田町と沢内村が合併)は、岩手県と秋田県の県境に位置する、人口7000人ほどの小さな町だ。国の自然環境保全地域や国定公園に囲まれた豊かな自然、温泉や特産品などの観光資源に恵まれ、日本で初めて乳児死亡率ゼロを達成するなど福祉・保健の町としても知られる。半面、日本有数の豪雪地帯であり、市街地へ出るには車で1時間以上かかる地域だ。

地域唯一の高校である岩手県立西和賀高校は、過疎と少子化の影響で、長い間、定員割れに悩まされてきた。1990年代前半からは積極的に生徒の確保に乗り出し、95年度には普通科に「福祉・情報コース」を新設して特色化を進めてきたが、すぐには生徒の増加に結び付かなかった。

そこで、01年度、当時の校長が隣接する地域の中学校にも広報活動を行った。ところが、広域から多様な生徒が集まり、中学時代に勉強についていけなかったり、不登校に悩まされたりといった、指導困難な生徒も入学するようになった。

恒常的な定員割れや生徒の多様化、急激に変わっていった学校環境への対応が喫緊の課題となった。

「分かる授業」が成績下位層の意欲を高める

学校の荒れへの対策というと、まず生徒指導に切り込むのが一般的だ。もちろん、同校でも、校則違反や服装・容儀の乱れを厳しく指導し、破損した箇所はすべて同じ色の合板を張って補修するなど、環境整備・美化を徹底した。しかし、新たに規則をつくったり、点検をより厳格にしたといったことは行わなかった。



岩手県立西和賀高校校長
酒井孝子 Sakai Takako
教職歴36年。同校に赴任して2年目。「課題を感じたら、必ず「手立て」「対策」を実行するよう心掛けている」



岩手県立西和賀高校副校長
菅原善致 Sugawara Yoshinori
教職歴28年。同校に赴任して1年目。「努力は必ず報われる。今、何をすべきかを定め、前進あるのみ」



岩手県立西和賀高校
瀬川ひとみ Segawa Hitomi
教職歴27年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「感謝の心を持って、社会に貢献できる人になつてほしい」



岩手県立西和賀高校
島山賢 Hatakeyama Ken
教職歴20年。同校に赴任して3年目。3学年主任。「自律できる生徒を育てていきたい」

最も留意したのは、生徒に徹底的にかかわり、学校・地域に対する誇りや愛着を持たせることだ。熱心に指導して積極的に大会に出場し、生徒が活躍できる場面をつくった。そうして、弁論大会で外務大臣賞を受賞することや、ボート部がインターハイ連続出場することなどを通して、生徒は自信を持つようになっていった。教科指導では、国・数・英で習熟度別授業を取り入れた。ただし導入当初は、生徒のためになる取り組みなのかどうか、確信を持てなかったという。菅原善致副校長は次のように述べる。

「下のクラスになった生徒の自尊心が傷つくのではないかと心配でした。しかし、実際には成績下位層の生徒ほど、喜んで授業を受けていました。生徒と話してみると、『中学時代は授業が全く分からず、座っているのがつらかった。だから、授業中に立ち歩いたり、廊下に出たりした。でも、今は授業が分かるし、質問をしても先生が丁寧に教えてくれるから授業が楽しい』と云うのです。中学校レベルの基礎的な内容であっても、『授業が分かる』ということが、生徒の気持ちで学校に向く動機になるということを感じました」

習熟度別授業は、各学年2クラスの小規模校であるために、運営で厳しい面があった。国・数・英の3教科をそれぞれ3クラスに分けて授業を行うことにしたが、3教科の教師は2人ずつしかいないため、3クラス同時に授業を行う

ことができなかつたのだ。そこで、苦肉の策として、体育科、家庭科、音楽科の教師に臨時免許で学力が低いクラスの指導に当たってもらうことを決断した。

「通常なら反対意見が出て当然なのですが、先生方は快く引き受けてくれました。教師全員が危機意識を共有し、学校を何とかしたいという思いを抱いていたからだと思います」

(菅原副校長)

教科外の中堅教師が、その教科の教師に積極的に指導法を相談する姿も日々見られたという。

就職後の離職率の減少を目指し地元就職への意識付けを徹底

次に着手したのは進路指導の改革だった。最も大きな課題だったのは、就職した生徒の卒業後の高い離職率だった。卒業生の約半数は就職者で、更にその半数が、東京など都市部へ就職していた。しかし、都市部で働いていた卒業生は、5月の連休明けには仕事を辞めて、地元に戻ってきてしまう場合が多かった。

そこで、同校が取った方針は「地元への意識付け」だった。就職しやすいという安易な理由で都市部に送り出すのではなく、自宅通勤できる西和賀町や北上市の企業を強く勧める就職指導への転換を図ったのだ。進路指導主事の瀬川ひとみ先生は、その狙いを次のように説明する。

「十分な職場体験や業務知識もないまま入社するために、卒業した生徒は想像と現実のギャップに戸惑いを覚えていました。加えて、初めての都会暮らしによる孤独、通勤のストレスなどに耐えきれず、心ならずも故郷に舞い戻ってしまう。就職先が自宅から通勤できる地元の企業であれば、保護者が物心両面から支えてくれます。少々つらいことがあっても、支えてくれる人が周りにいれば、仕事のストレスにも耐えられるでしょう。更に、目的意識がなく就職するのではなく、『地元の活性化のために働く』という使命感を持たせられるのではないかと考えました」

若者の定住は、地域の要望でもある。西和賀町は、住民1人当たりの地方債残高が岩手県内でも高額であり、高齢化率40%を超える過疎と超高齢社会の町だ。若者が地元に残ってくれるかどうかは、同町にとっても切実な問題だった。「地元への意識付け」は、進学についても同様だ。進学先自体は県外であっても、大学卒業後は地元に戻って就職するよう意識付ける。そのため、大学・学部選びも「とりあえず進学」ではなく、高齢化に対応するために医療や福祉分野に進む、地元の経済発展を図るために経営学や地域社会学を学ぶ、地元で根差した教育を実践するために教育学部に進むなど、将来、地元で貢献することを視野に入れた大学選びを意識させている。

「本校には、経済的な理由から大学進学に否定的な保護者もいます。保護者に進学を納得してもらうためにも、大学卒業後の就職を視野に入れた指導が欠かせません。生徒にとっても、学力的に厳しい状況からのスタートになるため、『とりあえず』という安易な理由では、厳しい課外講座や自宅学習に耐えられないでしょう。明確な目的意識や使命感を持たせることが、大学受験に対する意欲を高めるのです」（瀬川先生）

地域で働く人が地元の魅力や課題、生徒への期待を話す

「地元への意識付け」といっても、生徒が地元の魅力や課題そのものを知らなければ、地元へのこだわりも問題意識もわかない。そこで、地域を知るための進路学習や学校行事を積極的に取り入れた。

核となる取り組みは「総合的な学習の時間」だ。1年次は「地域を知る」をテーマに、地元の産業や特産品、福祉などについて学ぶ。2年次は、インターンシップや職場体験、北上市内企業見学会などの進路学習を行い、3年次は、西和賀町で働く卒業生訪問、町内企業見学会や企業説明会を行う。更に、生徒の進路希望に応じて、教師になりたいという生徒には、出身小学校で職場体験をさせたり、医療・看護系を目

読書記録「私の生きる道」

同校は、進路指導の一環として、3年次の夏休みに志望にかかわる新書を1冊読み感想を書くレポートを課している。テーマは「私の生きる道」。進路目標を達成するためには、進学や就職をする動機や意欲を強く持ち続けられるよう、「なぜ進学・就職するのか」を常に自分自身に問い、納得できる答えを見いだすことが重要だ。生き方の指針となる新書を読み、感想をまとめ、他者に発表させる活動を通して、その答えを模索させる。レポート作成の過程で志望理由がより明確になるため、推薦入試、AO入試、就職試験における志望理由書や面接にも応用できるという。

レポートは、すべて生徒の顔写真入りで文集としてまとめられ、卒業前に配布される。

指す生徒には、地元の病院を訪問させたり、教師がきめ細かく働き掛ける。町内の企業説明会では、病院や福祉施設、役場職員なども招き、地域の実情を教えてもらう。

「3年生の6月に行う町内の企業説明会では、そこで働く方々が、地域の現状や課題、思いなどを生徒に熱く語ってくれます。役場で働く人は『大学で○○を学んできて地元での活性化のために生かしてほしい』、病院の方は『看護師や助産師の資格を取り、町に戻ってきてほしい』など、生徒に対する期待や若い人材の必要性を話してくれます。生徒は、進学、就職に関係なく、『地元のために』と

いう使命感を高め、その後の大学入試や就職試験に臨んでいくのです」(瀬川先生)

一連の取り組みを通して、生徒が学ぶのは、地元の魅力や課題だけではない。

「本校には、中学時代に十分には手を掛けられないまま送り出されてきた生徒が多くいます。そこで、私たちは、進路行事や面接講座、小論文講座、長期休暇中の課外講座など、多くのプログラムを用意し、教師が徹底的に生徒一人ひとりにかかります。外部講師の来校も多く、企業を訪問する際は西和賀町のバスをチャーターしてくれるなど、自治体や地域の全面的な支援もあります。徹底的に手を掛けられることで、生徒に『自分たちは大事にされている』という意識が芽生え、前向きに進路に取り組むようになるのです」(瀬川先生)



3年生が全員参加した「ジョブカフェいわて」の職員を招いての面接研修会の様子。生徒が3人1組になり、面接者、受験者、観察者として面接練習を行っている。面接研修は3回実施。志望動機をつくり方から、敬語の使い方、面接練習まで幅広く指導を受けた。生徒に、多くの人々に支えられていることを実感させる取り組みの1つでもある

川先生)

地元の人の声掛けや感謝の言葉が自己効力感を高める

地域との触れ合いは、生徒が自分の存在価値を発見する機会にもなっている。地域に若者が少ないということもあり、同校は「祭りの運営に力を貸してほしい」「一人暮らしの高齢者の方々の家の雪かきを手伝ってほしい」などボランティアをよく依頼される。福祉施設にボランティアに行った生徒の中には、自分のしたことに対して涙を流してお礼を言う高齢者の姿に心を打たれ、地域への愛着を一層深める者もいる。3学年主任の畠山賢先生は次のように語る。

「『西和賀高校なら入れる』という消極的な理由で入学した生徒の中にはいます。理由で入学した生徒の中にはいます。そうした生徒たちは、入学当初、学校や地域に愛着を持っていません。それが、地元の人たちに声を掛けてもらったたり、感謝されたりする経験を通して、自分も人の役に立てると

いうことに気がきます。中学時代に不登校気味だった生徒が、自然と学校に足を向けるようになるのも、人とのかわりを通して、学校や地域の中に自分の居場所を見いだしているからではないでしょうか」

改革の成果は顕著だ。01年度16人の県外就職者は、08年度には4人とどまった。大学進学者数は、06年度入試の8人から、09年度入試では19人と大幅に増えた。例年4〜6人であった国立大合格者数は10人に達した。しかも、就職にしろ進学にしろ、目的意識や使命感を持った進路実現である。

今後の課題は、「教師の異動の影響を受けない強固な指導体制を築き上げること」と、酒井孝子校長は語る。

「本校では、目指す学校像の一つに『すべてにおいて本物を目指す学校』を掲げています。生徒の落ち着いた生活態度や、真摯に指導に取り組む教師の姿勢は立派であり、好調を維持する原動力になっています。しかし、教師の異動で指導ががらりと変わってしまうようでは、『本物』とは言えません。教師が代わっても、変わらぬ指導内容と実績を維持できる体制を根付かせる必要があります」
確立したノウハウを定着させ、引き継いでいく体制を構築できるかが、同校が地域のための学校として存在し続けられるかどうかを左右することになるだろう。

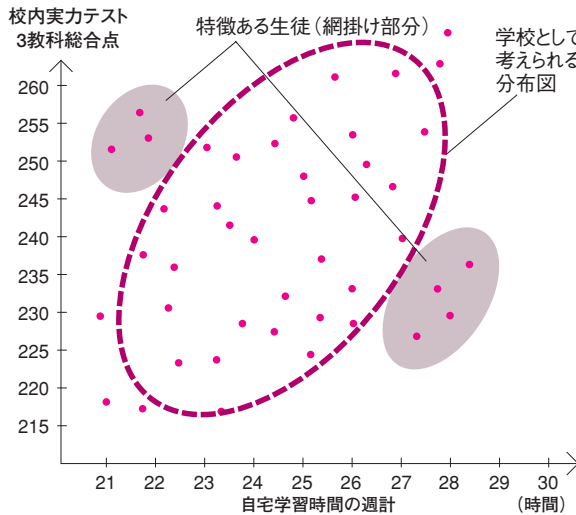
「3年生0学期」の教師の姿勢、生徒への意識付け

2年生の後半は、生徒が中だるみしやすいと同時に、生徒の学力とモチベーションを大きく高める可能性も秘めている時期である。高3進級時に受験生としてのスムーズなスタートを切るためには、いわゆる「3年生0学期」を教師、生徒はどのように迎えるべきかを考える。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです

学力と学習習慣の関係を再確認するために

図1 学力と学習量の相関からクラス特性を探る



クラスごとに作成し、分布図を表示
クラスごとに学力と学習時間の相関を
図示する。併せて、学校として考えら
れる学力と学習時間の相関の分布図を
示す。

各クラスの特徴と分布状況を確認
各クラスの学力と学習時間の状況を踏
まえて、「学習時間が確保でき、その
成果も表れているクラス」を確認。そ
のクラスの取り組み内容を共有する。
また、分布図から外れた生徒をチェックし、
学年で共有する。

1 クラスの現状を教師が再確認し、指導の土台とする

伸びているクラスの特性を共有するために

図2 1年次からの変化にクラスの伸長や課題を見いだす

	2年生11月 総合点(平均)	1年生11月 総合点(平均)	増減	2年生11月 自宅学習時間の週計	1年生11月 自宅学習時間の週計	増減
全体	242.6	222.2	+20.4	25.5h	20.5h	+5h
1組	230.3	238.5	-8.2	20.0h	24.0h	-4h
2組	239.5	240.5	-1.0	25.0h	28.3h	-3.3h
3組	235.1	210.1	+25.0	26.5h	20.0h	+6.5h

生徒の1年次のデータを再集計

平均点管理がされている実力テスト、校外模試などのデータを活用し、高2の今と高1の時点での成績変化を比較。高1のデータは高2のクラスの生徒がそのまま同じクラスと仮定して再集計する。自宅学習時間の週計も増減を算出。

成績と学習時間の相関を確認

3組は、高1の時点では成績が振るわなかったが、高2で自宅学習時間を確保したことで成績が上昇。学力向上と学習習慣の相関が高いことが分かる。3組でのクラス経営の工夫などを学年で共有したい。

どの学力層も伸ばすのが教育 クラス間で成績が多少ばらつくことはあり、その差に一喜一憂する必要はない。どのクラスの生徒も2年生の4月のスタート時点よりも力をつけて3年1学期をスタートさせられるよう、教師の力を結集したい。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラスαの指導

指導の目線合わせ資料で 共通認識を持つ

2年生3月までの約5か月間。それぞれの時期にどのような指導がポイントになるか。指導シラバス（小誌ウェブサイト参照）などを学年団で共有すれば、共通認識を持って、指導に当たれるだろう。特に、「指導の時間が確保しにくくなる3月までに、できる限り自主的な学習習慣を定着させていく」「家庭学習のプランニングを3教科から5教科へと意識転換させる」などの重要テーマについては、学年共通で取り組む課題という認識を持って一貫性のある指導を行いたい。

進路検討会などで、 生徒個別の状況も共有する

クラスごとの現状を分析し、学年で共有することは重要だが、もう一歩進めて、生徒個々の学力や学習状況、志望校などを学年全体で共有すれば、更に学年としての団結力が強まるだろう。もちろん、多忙な時期に生徒全員について検討していく時間がなかなか確保できないこともある。その場合、各クラスで気になる生徒だけでもピックアップし、今後の指導を検討していく。高3進級前のこの時期に、「学年全体で生徒を見ていく」という雰囲気を教師間に醸成することが重要だ。

学年集会で 生徒にフィードバック

右頁で紹介した2つのデータは、いずれも「教師間の共有」を目的としており、生徒にそのまま見せると、生徒は各クラスの成績を「競争」という観点でしか見ないおそれがある。データから読み取れる特性を生徒にフィードバックする際は、学年集会などで「学習時間の増減は成績の変動に一致する」「授業前の着席が徹底できているクラス、遅刻欠席の少ないクラスは学習状況も良い」など、クラスの特徴、エピソードを交えながら生徒の納得度を高めたい。

活用後のフォロー

◎クラス特性を分析し、学習状況の課題を洗い出した後は、学年の今後の指導の方向性を検討することになる。その際は、「この時期には学習時間を記録させ、量への意識付けを図る」「1月、2月の学年集会では、大学入試のトピックを紹介して意識を高める」など、できるだけ具体的な実行項目を挙げていきたい。3月の春休み前までに、学習時間などをどのように伸ばすか、具体的な数値目標を立てて学年で共有してもよいだろう。3年生0学期は、無策のままでは「中だるみの2年生3学期」に陥ってしまう。その危険性を教師が常に意識し、現状をチェックしていく仕組みが必要だ。

データ活用
のねらい

3年生0学期の意義を教師間で共有

学習習慣の定着の重要性を客観的に証明する●授業内容の理解度・定着度を測る校内模試の成績は、センター試験に対応できる基礎力を測るバロメータになるだけでなく、生徒に3年生4月までに学習習慣を修正するよう促す基礎資料にもなる。また、それだけではなく、教師が自分自身の日々の教科指導の妥当性、これまで与えてきた課題の量や質の適切さなどを客観的に分析する貴重なデータとしても活用できる。

本気になって0学期指導に取り組む姿勢を持つ●3年生0学期は生徒が活発に部活動に取り組む時期でもある。忙しい高校生活の中でも、生徒が志望の実現に向けた確かな手ごたえを感じられる実践を積み重ねさせ、決してあきらめさせないことが大切だ。生活時間をコントロールし、一定の学習量を確保させて成果を上げられるよう、面談を充実させ、教科指導力を向上させながら教師自身がアクションを起こしたい。

データ活用
の流れ

まずは、各クラスの状況を把握する

原則論を可視化する●「やるべきことをやっている者が強い」ことを教師間で可視化し、「授業中心」を生徒に強く訴えている指導に対する教師の責任感を喚起したい。学力と学習量の相関（図1）、それを経年で分析するデータ（図2）を作成し、学年団で共有する。成果が出ているクラスの取り組みや学習特性を共有する。同時に、特徴ある生徒（図1の網掛け部分）の学力特性なども共有し、生活環境の理解や生徒の個性を取りこぼさない指導も心掛けたい。

クラスごとの問題点を探る●「学習時間は確保できているが、成績は下がっている」といったクラスでは、3年生0学期に学習の仕方を個別面談でチェックし、修正後の実践を積み重ねさせる。生徒に過度な負荷を与えないためにも、授業内容の吟味や小テストの在り方など指導の適切さを再検討するデータとしても活用したい。

クラス特性の 把握から、 学年としての 方向性の確立まで

学力と学習習慣の相関データなどで、クラスを多面的に把握し、各クラスの特性を共有する（図1使用）

1年時からの比較により、2年時での指導の検証をする（図2使用）

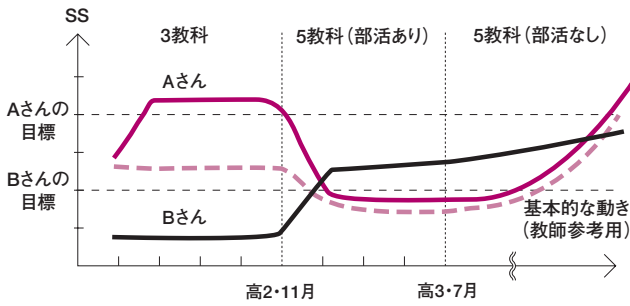
クラス担任が、現状を分析し、それを踏まえた今後の指針を作成する

各クラス担任の報告を踏まえ、学年としての方向性、重要ポイントなどを共有する

5教科型学習になることによる変化を意識させる

図3 5教科型の受験データを日々の学習に生かす

ダウンロード



5教科に増えたことで、全体の成績が低下しているケース。学習が十分ではない地歴・公民、理科の対策次第でばん回は十分可能。

地歴・公民、理科が得意な生徒。教科数が増えたことで成績が上昇したケース。3教科を重視しながらも、得意分野を褒め、志望校の入試科目との相関も意識させながら学習意欲を高めたい。

図4 5教科での学習計画

ダウンロード

■これまでの学習

平日	-----
休日	-----

■3年生0学期の学習

平日	-----
休日	-----

これまでの学習実態に見られるムダにも注目させ、修正ポイントを意識しながら0学期のモデルを立案させる。週末の過ごし方は大きな鍵になるので重視する。

■5教科学習への切り替えに向けての留意点

◎地歴・公民、理科の取り組み

◎テスト対策

◎部活動との両立

これらの欄に生徒が記入した内容と、左で記入した3年生0学期の学習計画は整合性のあるものかどうかを生徒自身に考えさせる。

※小誌ウェブサイトでは、上記のデータに加えて、更に10月から3月までの地歴・公民、理科の学習内容を整理しながら、5教科学習への切り替えを行うタイプも用意しています。ぜひご参照ください。

3年生0学期の姿勢を意識付ける

図5 受験に向けた学習の姿勢

ダウンロード

項目	教師からのアドバイス	先輩からのアドバイス
学習の仕方	・1週間の教科別学習時間をチェックして、5教科の学習バランスを考えてみよう。部を引退したら、部活動の時間がそのまま学習時間になるぞ。	・部活動に参加している人は、限られた学習時間をどう5教科に分配するか、すき間時間を生かした学習ができるかがポイントになりますよ!
模試の受け方	・受けっぱなしは絶対にいけません。大切なのは復習。模試を受けた当日、1週間後、そして1か月後の3回解き直せば完璧です。	・解けなかった模試の問題をノートにまとめて、何度も繰り返し解くようにしたところ、苦手教科が克服できましたよ。
週末課題	・学校からの週末課題は、全員が最低限やっておくべき課題。これに加えて、苦手分野など自分なりのテーマを見つけて取り組むことが大切。	・3年生になると週末課題はグンと減ります。それは、自分で課題を見つけなければいけないからです。高2のうちから自学自習に慣れておきましょう!
冬休みの学習	・週末よりも長いスパンで学習計画を立てられる冬休み。計画を立て、実行し、必要に応じて修正するという経験を積んでおきましょう。	・計画が予定通りにこなせない時、どのタイミングでどんなふうに変更するかは慣れが必要です。そうしないと3年生の夏休みに慌ててしまうよ!

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください! 右のウェブサイトをご覧ください。ただけます。

●2007年12月号
 「2年生を受験生にする『3年0学期』の意識付け」
 ●2008年12月号
 「2年生冬休み前後の学習習慣の定着」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
 生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が
 ダウンロードできます!

生徒指導・
 進路指導ツール集

ウェブサイトから
 ダウンロード!

プラスαの指導

授業や課題、学年集会で 5教科を意識付ける

負担感が大きい5教科型にスムーズに転換させるためには、生徒がその意義や思いを納得し共感することが鍵になる。地歴・公民、理科の授業ごとに基本演習課題を与えて着実に基礎力を定着させたり、学年集会でそれぞれの教科担当にノートの書き方や苦手分野の克服の仕方など、学習の取り組みについて語ってもらったりすることで、学年全体として「5教科型学習へのソフトチェンジ」の機運を盛り上げていきたい。

無理をすること、 失敗することから学ばせる

生徒が5教科型学習にすぐに移行できるとは限らない。しかし、だからこそ5教科型の学習ができるように自律的に生活をコントロールし、志の高さに見合った生活自助努力を継続させたい。その結果「できた」という小さな達成感を大切に指導し、「できなかった」ことは何が原因であるのかを生徒と分析することで、その克服に向けてとるべき具体的なアクションもはっきりする。3年生0学期の失敗経験も生徒の自立を促す上で貴重な糧となるという視点を持って指導したい。

高校の「学びの醍醐味」を 追求する

5教科の学びに真剣に取り組むことで、それまで無関係に見えていた複数の事象が一瞬でつながったり、表層的な暗記にとどまっていた事項が深く理解できたりするようになる。背景知識が教科学習力を引き上げ、学問そのものが楽しく感じられる機会も増えてくる。知的好奇心を刺激する指導によって生徒の主体性を徐々に引き出し、高校での学びの醍醐味を体感し始める好機として3年生0学期をとらえたい。

活用後のフォロー

◎最近の生徒は1度成績が下降すると、「まだ入試までに時間がある」と教師が声を掛けても、高い志望を持つとしなくなる傾向がある。あきらめさせず、3年生0学期に5教科をしっかり学習させることは、実際に3年生に進級した時、掲げた志望に対するこだわりを強化する意味で重要になる。ただし、1度説明しただけでは、すぐに学習スタイルを改善できない生徒は多い。教師の働きかけが効果として生徒の行動に表れるまでには、2、3か月かかることもある。3年生4月を見越し、粘り強く指導していくことが重要だ。中期的展望に立って、学習記録や面談などでこまめに確認していきたい。

データ活用
のねらい

5教科型学習への自信を持たせる

5教科の学習を経験させる ●2年生の11月模試から、5教科になるのをきっかけに、生徒に5教科の学習を意識付けるようにする。部活動などで忙しい中で、5教科を学習する経験を早期にしておくことが、来春以降に生きてくることを伝える。この際、学習時間の総量を極端に増やさずに5教科の学習計画を立てさせることが重要。実現可能な計画に取り組みせ、受験勉強の疑似体験を「自分でもやればできる」という成功体験として印象付けたい。

基礎学力定着から進路意識を高める ●「進路を選ぶ裏付けになる学力」がない生徒は、この時期の進路希望調査でも弱気になりがちだ。5教科の基礎学力を定着させて、成績を上げさせたり、得意科目を認識させることで自信を持たせたりして、志望の成熟度を高めていくことが重要だ。

データ活用
の流れ

0学期にすべきことを伝える

学年集会やHRなどを利用する ●まず3教科から5教科へと変わったことが、成績にどのように影響するかを示し(図3)、その上で5教科になってからの学習計画(図4)、学習に取り組む姿勢(図5)について、学年集会やHRなどで訴求すると効率的だ。3年生0学期になることで、今までと何が変わってくるのか、明確に生徒に示したい。

「褒めるための学習記録」を付けさせる ●一斉指導で、3年生0学期を意識付けた後、学習記録で実際にすべきことができているかを個別に把握する。この時の教師のスタンスとしては、いつも以上に「良いところを見つけ、褒める」を徹底したい。5教科になって心理的な負担感が増している生徒に、「理科の好成績が武器になるよ」「世界史と英語を欠かさず勉強している成果がもうすぐ出るよ」など前向きな声掛けで背中を押したい。

集団への 意識付けから 個別指導へ深化

学年集会やHRなどで、模試の成績推移を提示し、5教科型になったことによる影響を説明する(図3使用)

地歴・公民、理科が入り、5教科になったとき、具体的にどのように学習すればよいかを考えさせる(図4使用)

3年生0学期における学習の姿勢を整理し、意識付ける(図5使用)

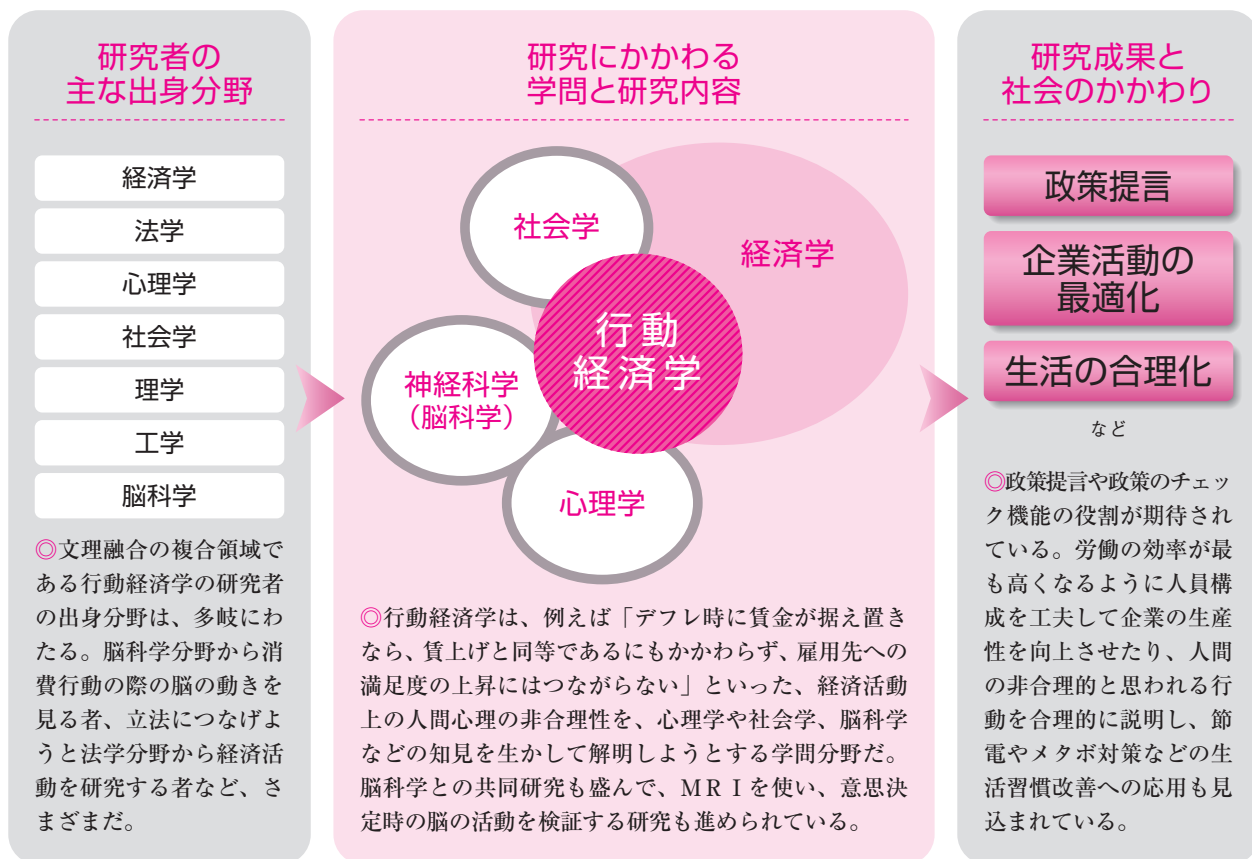
生徒がしっかりできているか、学習記録や面談で、その都度確認する

複雑な人間心理が引き起こす 経済活動を合理的に解明

大阪大 社会経済研究所 行動経済学研究センター 大竹文雄研究室

伝統的な経済学は、企業や消費者の合理的思考を前提として、さまざまなモデルを構築してきた。しかし、バブル崩壊やサブプライムローン問題といった経済問題の背景には、合理性だけでは説明できない複雑な人間心理がある。行動経済学は、人間の非合理性にもスポットを当てて経済現象を解明する新しい経済分野だ。グローバルCOEプログラム「人間行動と社会経済のダイナミクス」拠点リーダーでもある大阪大社会経済研究所の大竹文雄教授に、研究成果と社会への応用について聞いた。

フローチャートで分かる大竹研究室





大竹文雄 教授 Otake Fumio

大阪大社会経済研究所教授。グローバルCOEプログラム「人間行動と社会経済のダイナミクス」拠点リーダー。大阪大大学院経済学研究科博士前期課程修了。大阪大経済学部助手、大阪大社会経済研究所助教授等を経て、現職。第48回日経・経済図書文化賞、第27回サントリー学芸賞、第46回エコノミスト賞、2008年度日本学士院賞など受賞歴多数。

研究分野の概要

人間の非合理性に肉薄する 最先端の経済学

最初に、行動経済学は、経済学の中でもどのような研究をするのかを説明したいと思いません。伝統的な経済学では、「人間は合理的に行動する」ことを前提に研究を進めてきました。例えば、「人間はどのような時に、最も一生懸命に働くのか」を検証した場合、これまでの経済学ならば「より高い報酬体系を示された時」というのが答えになっていました。

ところが、現実はずしもそうではありません。例えば、自分では高い給料をもらっていると満足して仕事に従事していても、自分と同レベルの能力の人がより高い報酬を得て

いると知るや、労働意欲がそがれるケースがあります。あるいは、給料は高くなっても、上司や同僚、部下から頼りにされていることが労働意欲に結び付く場合もあります。労働意欲には、賃金の高低だけでは説明しきれない、人間の複雑な心理が大きくかかわっているのです。

バブル崩壊やサブプライムローン問題といった経済問題の背景にも、合理性だけでは説明できない、複雑な人間心理が潜んでいます。このように、行動経済学は、合理性だけでは説明しきれない人間の経済活動を、心理学や社会学、脳科学などの他の学問分野の知見を取り込みながら解明しようとするものです。「不況」は、合理性では説明できません。物価が下がっても給与額が変わらなければ、賃金価値は上がり

研究内容

肥満も多重債務も 非合理的な経済活動の 結果から生まれる

「人はなぜ肥満になるのか」という問題も、行動経済学の研究対象となります。伝統的な経済学では、人間は合理的に意思決定をすると考えられていますから、肥満になると考えられています。合理的な選択の結果と考えます。「今、食べるという行為」と、「将来、太るといふ結果」をてんびんにかけて、今、食べる方を選んだため、太っているとみるからです。

しかし、それにもかかわらず、実際には太って悩んだり、ダイエットに励んだりしています。人間は、長期的な選択については比較的、合理的に考えられるのですが、目先の欲

求については、誘惑に負けてしまう傾向が強いのです。

以上のことを、アンケート調査により明らかにしたわけですが、この調査結果だけでは、心理学の研究と何ら変わりがありません。行動経済学の研究ならではの特徴は、こうした人間の行動特性に関する知見を、社会システムの設計やそれが有効かどうかのチェックに生かそうとするところなのです。

肥満の人が増えると、医療費の社会負担額は増えます。かといって、政府が人々の食事を規制するわけにもいきません。そこで導入したのがいわゆる「メタボ検診」です。肥満の問題は、食べる行為と、その結果である肥満との間に大きなタイムラグが生じるために起こります。肥満になる前に健康診断を受けてもらい、BMIなどの体格指数を示して警告することは、自己規制を促す効果を期待しているのです。

肥満を誘発する人間の「先延ばし行動」は、消費者金融における多重債務者問題とも似ています。伝統的な経済学では、市場がうまく機能しない時を除いて、政府は市場に介入



写真 行動経済学の経済実験では、実験室に被験者を集めて、パソコンを使ってさまざまな調査を行う

すべきではないと考えます。貸金業についても、人は返済を前提に借金をしているのだから、いくら金利が高くても規制を加えるべきではないと考えます。

しかし、食べ物の誘惑に負けたり、運動が面倒だからといってダイエットに失敗してしまう人がいるように、金利が高くてもお金を借りてしまい、期日までに借金を返済できなくて債務不履行になる「非合理的な人」は大勢います。そういう人々が社会問題になるほど増えてしまうならば、本人の意思に反しても借りられない

ような制度をつくらなければなりません。上限金利の規制の引き下げは、行動経済学的に見ると、複数の借り入れ先から返済能力額を超えて借金をする、多重債務問題を解決するための効果的な措置であると評価することもできるわけです。

高校生に伝えたいこと

論理的思考力と人間への関心が経済学を見る土台に

実家は商店を営んでおり、私は商品に価格シールを張る仕事を手伝っていました。中学時代には、オイルショックが起きました。インフレが

進む度に商品の値段が上がっていくので、私は何度もシールを張り替えました。その時に、ふと「あらかじめ価格の変動が予測できれば、もうかるのではないか」と思ったのです。これが、経済とのかかわりの始まりでした。

大学で勉強してみると、経済学にはもっと面白い面がありました。経済予測も大切な仕事ではあるけれど、それはほんの一部。どうしたら、世の中が豊かになるのか、そのための仕組みをどのように設計すればよい

のかということを追究するのが、経済学の重要な役割であると分かったのです。

私は、家業の手伝いを通して、生の経済に触れることができましたが、学校で公民や政治・経済の理論を学んでいるだけでは、経済学の本当の魅力は感じられないかもしれません。実際の経済学は、もっとダイナミックで、人間的な魅力にあふれた学問です。その中でも、とりわけ人間らしさを追求しながら、それを社会の仕組みの設計やチェックに生かすことのできる分野が、行動経済学なのです。

行動経済学の研究を志すならば、数学に代表される論理的な思考力を身に付けることは欠かせません。その一方で、観察や実験などの理科的な手法や、歴史や社会問題などの教養、人間そのものに対する興味も大切です。経済と人間の両方、あるいはどちらか一方にでも、興味のある人には、やりがいのある分野だと思います。そして何よりも、社会に対する目、自分自身に対する認識に、大きな変革をもたらしてくれる刺激的な学問ではないでしょうか。

用語解説

1 行動経済学

アメリカを中心として発展した新しい経済学の分野。より人間心理に近い現実的な経済行動をモデル化し、経済現象を実証的に分析する。米国のプリンストン大学のダンエル・カーネマン教授の研究が、2002年にノーベル経済学賞を受賞したことがきっかけとなり、世界的に注目されるようになった。

2 BMI

Body Mass Indexの略。身長から見た体重の割合を示す指数。BMI = 体重(kg) ÷ 身長(m) ÷ 身長(m) で算出。日本では標準はBMI 22で、BMI 25以上が肥満とされる。

3 上限金利の規制

かつて、貸金業者の貸付に適用される金利は、利息制限法と出資法によって上限金利が規制されていた。しかし、前者の上限は年率20%で、罰則規定がない一方、後者は年率29.2%であるため、ほとんどの貸金業者は、後者を基準に金利を定めていた。しかし、多重債務者や自己破産者の急増を受けて、2006年に貸金業法が改正され、上限金利を利息制限法の年率20%まで引き下げられた。

男女間の意識の差を 労働の効率化に役立てる



水谷徳子^{さん}
Mizutani Noriko

大阪大社会経済研究所特任研究員
(富山県立高岡高校卒業)

Q なぜ経済学分野を
目指したのですか

A 高校時代は理数科に在籍して
いました。進学先やその先

の就職を踏まえ、進路を決める時になつて、理学部や工学部で学ぶ自分が想像できないことに気がきました。かといって、人文科学にも関心が向かわず、悩んだ末、名古屋大経済学部への進学を決めました。数学というツールを使い、社会や経済の現象を説明する学問が自分に合っているかもしれないと考えたのです。

Q 現在の研究内容を
教えてください

3年生の時に経済学についてまだ
学び足りないと感じ、大学院進学を
決意しました。学部では理論的な研
究が中心だったので、実証研究をし
たいと考え、カリキュラムが充実し
ている大阪大大学院に進みました。

A 実験結果から得られた統計
を基に、男女間で競争への選

好がどのように異なるのかを調べて
います。実験方法は、被験者にコン
ピューター画面に次々に現れる計算
問題を解いてもらいます。報酬体系
として、歩合制(1問ごとに報酬を
設定)かトーナメント制(グループ
中1位の人が報酬をもらえる)かを
選択させ、どのように労働(計算)
の効率が変わるかを測定しました。

その結果、女性よりも男性の方が
トーナメント制を選ぶ率が高く、よ
り競争的な環境を選択する傾向が強
いこと、男性が競争的環境を好むの
は自信過剰によることなどが明らか
になりました。また、さまざまな男
女比でグループ作業を行ってもら
い、男女の意識の差を調べたとこ
ろ、男性はグループ内が全員同性で

あると最も自信がなくなるのに対し
て、女性はグループ内がすべて同性
であると最も自信過剰になることが
明らかになりました。

この実験により、人事マネジメン
トの分野などへ労働の成果を高める
ための理想的な男女比や、報酬体系
を決める際の基礎的な資料を提供で
きると考えています。

Q 高校生へのメッセージを
お願いします

A 行動経済学を学んで感じた
のは、高校時代に抱いていた

「経済学」のイメージとは掛け離れ
ていたことです。私の研究には、経
済学や数学だけでなく、心理学や社
会学などの幅広い知識、歴史や社会
情勢などの教養も欠かせません。

今回初めて、被験者を
集め、パソコンなどを用
いて行動パターンを分析
する経済実験を行いました。
従来の経済学では、
数学モデルを使った理論
の証明と、統計を用いた
実証研究が主な研究方法
であり、私が行ったよう
な経済実験は、行動経済

学の発展に伴い活発になった手法で
す。私自身も大学院時代までは、官
公庁などが公表したデータを用いた
実証研究しか行っていませんでした。
そのため、人を集めたり被験者
の報酬を用意したりといった事務的
な手続きの経験がなく、思いのほか
苦労しました。チームワークやコ
ミュニケーション能力、データと向
き合うための忍耐力も必要だとつく
づく感じました。

行動経済学は、高校時代のあらゆ
る体験が生かせる分野です。偏りな
く学習に取り組み、部活動や学校行
事などにも悔いが残らないような高
校時代を送ってください。それが、
将来の大学での学びを充実したもの
にしてくれるはずです。

大学院時代の水谷さんの1日

- 8:00 起床 通学
- 10:00 研究 最新の論文や刊行物の中から興味のある論文を読み、研究に関する理論や手法を習得する
- 12:00 昼食
- 13:00 研究 セミでの報告資料の準備、授業の予習復習。ゼミや授業のない日は実証研究に必要なデータを収集し、整理する
- 15:00 セミなどがなければ研究結果の分析
- 18:00 夕食 友人と歓談
- 19:00 研究再開 分析や論文執筆に費やす。時には社会学や心理学の専門書も読む。研究が終了しなければ深夜まで続けることもある
- 23:00 帰宅

生徒と協働して、「遊び」を取り入れた質の高い授業を目指す

茨城県立土浦第一高校教諭

市川真人

ichikawa Masato

異動は効果的な研修の一つだ。進路多様校から県下有数の進学校に赴任した市川真人先生は、レベルの高い授業をしようと必死だった。しかし、目の前には、国語の楽しさを感じられず、授業に集中していない生徒がいた。今、考えさせる授業を目指し、試行錯誤を積み重ねる。

かつての私

進路多様校と進学校のギャップから授業で必死に教え込む

3年前、茨城県立土浦第一高校に異動が決まった時は、期待とプレッシャーでいっぱいでした。卒業後の進路は就職が中心という工業高校から、赴任2校目で東京大合格者数が毎年2桁という県内トップクラスの進学校に。母校への赴任はうれしい半面、かつて自分が受けていたような授業を、今の自分に出せるのだろうかという不安がありました。

初年度に受け持ったのは2年生でした。担当教科の国語科には3年間の指導の流れが定

められており、初めて赴任した教師でもそれに沿って、先輩の先生方から助言を受けていれば、授業が出来るようになっていました。しかし、指導法自体は一人ひとりの教師に任せられており、生徒からはレベルの高い質問も受けます。私は毎日、必死で授業の準備をしました。次の授業の予習をノートにびっしり書き、その通りに授業を進めていったのです。ところが、授業では手応えがあまり感じられず、生徒の集中していない様子が見て取れます。現代文の授業で、問題に対する解答を板書させても、前後の文章の流れを無視して答えだけを書く生徒が目立ち、生徒に考えさせることが出来ていないのは明らかでした。



いちかわ・まさと

教職歴8年。茨城県立土浦第一高校に赴任して3年目。講師を2年間経験し、茨城県立日立工業高校に5年間勤務後、30歳の時に母校である同校に赴任。担当教科は国語。1学年担任。

◎1897(明治30)年開校。55分授業、月2回の土曜講座を展開。3年進級時に文理コース分けを行う。
◎教員数：69人 ◎1学年生徒数：約320人 ◎2009年度入試合格実績(現浪計)：国立大は、東北大27人、筑波大38人、東京大16人、一橋大11人、東京工業大13人、京大5人など計176人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ714人が合格。

授業後は、「なぜかうまくいかない」「何かがしっくりこない」という思いの連続でした。生徒はなぜ授業に集中出来ないのだろうか。そう何度も考えているうちに、生徒を見ていない自分に気付きました。

「難関国立大に合格させるには、これだけは教えなければならぬ」、そう思っていた私は、授業の準備とそれを教え込むことに必死になり、自分の話に対してどのような反応を示しているのか、授業中の生徒の様子に目配りが足りなかったのです。

私は生徒の様子を知りたいと思い、授業後はなるべく教室に残り、生徒と雑談をしたり、掃除や休み時間にも話をするようにしました。すると、少しずつ、授業に集中する生徒が増えていくのを感じました。生徒との信頼関係が教科指導の上でも鍵となる、ということを知ったのです。

現在の私

生徒を信頼し、 いかに協働して授業をつくるか

赴任2年目には、学園祭実行委員の顧問を務めました。本校では学校行事のほとんどを生徒自身がつくり上げていくので、顧問は生徒をサポートしながら、調整するのが役割です。生徒は、仕事を任せ、自ら考えさせることで驚くような成長をし、成果を出しました。この経験から、生徒の能力と可能性を信じるのが大切だと改めて感じました。

授業でも、教師が教え込むだけでなく、生徒に考えさせ、力を引き出せるようになりたい。私はそう思い、現在、少しずつ授業を変えています。特に現代文は、決まったことを教えるというよりも、いろいろな意見を出させたり、答えを導く過程が大事だったりします。正解を出すこと以上に、考えることが大切だということを授業で伝えたいと思い、生徒が学ぶ過程を楽しめるような「遊び」を取り入れるようにしました。

私の高校時代の恩師は、「落語のような授業を目指している」と言っていました。導入で生徒を引き込み、話を進めながらとところどころで笑わせ、最後には考えさせて終わる。「遊び」を取り入れた授業は、予習ノート通りの授業と比べ、予測ができないので怖い

す。しかし、生徒と歩調が合った時にはとても充実した授業になると感じています。

最近の授業では、「理念・概念・観念」の違いを考えさせました。それぞれの言葉の意味を立ち止まって考えた経験は、文章を読み込んだり、誰かと話をしたりする際に生きてくるのではないかと思います。ほかにも、一言で済ませてもよいことを30分掛けて考えさせたり、課題文と関連する資料を読ませたりと、試行錯誤を続けています。

しかし、「これなら生徒が関心を示すだろう」と思っても、実際にはうまくいかないことばかりです。同じ内容で進めているはずなのに、あるクラスではうまくいったことが、ほかのクラスでは全然ダメだったということがよくあります。授業後には何が悪かったのか、良かったのかを振り返るようにしています。目立たない生徒もしっかり授業に巻き込むことが出来ていたか、受験を見据えた指導とのバランスは適切だったか、今はそれらのポイントで振り返りをしています。

「指導力は、授業で実践していくことで磨かれる」と自分を鼓舞し、考えたことを教室で投げ掛け、生徒の正直な反応を受けて、「良かった、ダメだった」を繰り返しています。生徒に教えつつも、生徒に育ててもらっているようなものであり、これからも生徒と一緒に授業をつくっていくと思います。

これからの私

日々の授業で信頼を築き 生徒の進路実現に寄与したい

2009年度は1年生の担任となりました。現任校での2年間の経験を糧に、3年後の進路実現を見越した指導を行えるようになるのが、今後の課題です。

3年生を初めて受け持った時、先輩に「生徒の進路は一度きりだ」と言われました。教師は、毎年、何人もの生徒を送り出します。しかし、一人ひとりの生徒にとって、高校卒業時の進路選択は人生に一度。今は、生徒がより良い決断ができるように導くにはどうしたらよいのかを考えています。生徒と進路に関する建設的な話し合いをするには、信頼関係が必要不可欠ではないでしょうか。個々の生徒を多面的に理解し、相互の関係を深めるような授業を模索することで、生徒の進路実現に寄与していきたいと思っています。

20代の頃は先輩方が叱ってくれたり教えてくれたりしていましたが、30代になって、そうした機会が少なくなりました。まだまだ未熟者ですが、周囲からは一人前の教師として見られます。自分で考えて計画し、行動し、反省していけるよう、現状に満足せずに意識を高く持ち続けていくことも、課題の一つです。

中学校の現場から

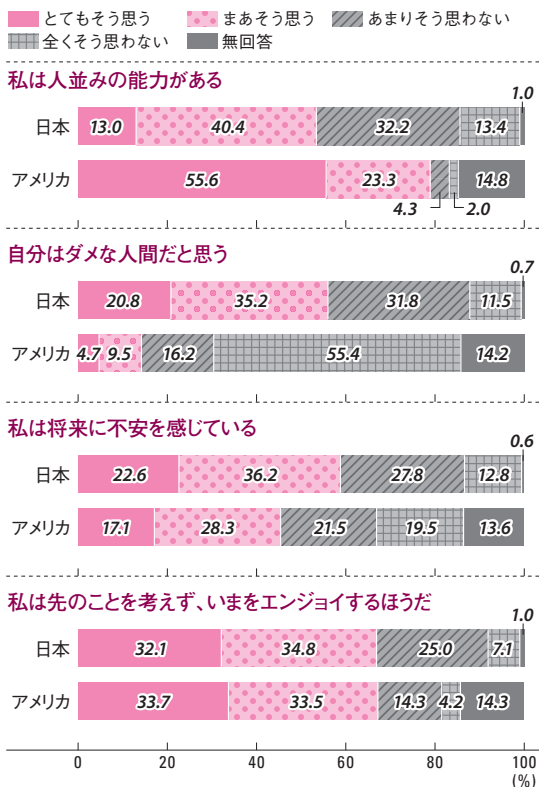
自己肯定感を高めるために 生徒と どう向き合っているのか

生徒が自立しにくい背景に、「自己肯定感の低さ」「自信のなさ」がよく挙げられる。

中学校においても同様の課題を抱え、生徒指導に工夫を凝らしている。

今号では、生徒を「認める」指導サイクルを確立した佐賀市立金泉中学校の取り組みをレポートする。

図 自己肯定感に関する日米比較



出典／「中学生・高校生の生活と意識調査報告書」（財団法人日本青少年研究所）。2008年9～10月実施。対象は日本、米国、中国、韓国の中学生と高校生。日本は中学生807人、高校生1,210人。上図では、日本とアメリカの中学生の結果のみ掲載している。

依然として低い 生徒の自己肯定感

文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、2007年度、中学校においていじめの件数は減少が見られたものの、校内暴力の発生件数は3万3525件と過去最多となった。学校数で見ても、暴力行為が発した中学校数は4051校に達し、中学校の約37%が何らかの暴力行為に悩んでいることになる。

また、近年、「自分への自信や将来への前向きな気持ち」が低い生徒が

多い」としばしば言われる。財団法人日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識調査報告書」によると、日本の中学生は、他国と比較して、自分の能力に肯定的な態度を持つ割合が低い傾向が明らかになった（図）。更に、「親によく褒められると感じていない生徒」や「自分の意思を持って行動できない生徒」に、「自分はダメな人間である」と思う傾向がより強く見られた。

このような現状の中、生徒の自己肯定感を高めることで問題行動を減らす取り組みをしている、佐賀市立金泉中学校の事例を紹介する。

出番と役割を与え、承認する 「開発的生徒指導」で 生徒を育てる

佐賀県佐賀市立金泉中学校

「対処的」な指導から
「開発的」指導に転換

かつての佐賀市立金泉中学校は、いわゆる「荒れた学校」だった。生徒同士の暴力や教師の不祥事などが相次ぎ、学校は危機的な状況にあった。「2003年頃が最も厳しい時期でした。教職員は皆、頑張っていました。成果はなかなか出ず、生徒も教職員も傷つき、そして地域からの信頼も失っていました」と、当時、教育事務所所長として同校にかかわっていた校長（当時）の佐藤範男先生は話す。そうした状況を知っていた佐藤校長は、04年度に校長として着任した時、「元氣あふれる学校づくり」を学校目標に掲げた。

「『みんなが一つになって元氣な生徒を育てよう』と、事務職員も含め

て教職員全員に伝えました」

まず見直したのが、生徒指導の在り方だ。佐賀大の倉本哲男准教授の指導を踏まえ、問題が起きてから対応する「対処的生徒指導」に終始せず、生徒一人ひとりに「出番」を与えて「役割」を果たさせ、その行動を「承認」することによって、生徒の責任感や自信を育て、良いところを伸ばしていく「開発的生徒指導」を行うようにした。

このような指導を取り入れたきっかけは、04年度に劇団を招いて行われた体験授業での出来事であった。

この授業は、劇団員の指導の下で、生徒がオペラ的一幕を演じるという内容だった。普段から問題行動が目立っていたある生徒は、開始直後は劇団員の言うことをほとんど聞かず、いたるところが、劇団員は、

その生徒を事あるごとに褒めた。すると、頑なだった生徒の顔は次第に和らぎ、「今のは良かったね」などと劇団員から声を掛けられることを喜ぶようになっていった。公演が終わり、劇団員を乗せたバスが校門を出ていく時には、生徒は涙を流しながら手を振っていたという。

「この生徒の姿を見て、私が何より感じたのは、子どもが『承認』されることに飢えていること、そして、承認の機会を与えてこなかった、それまでの生徒指導への反省でした。私たちは、対外的に良いところだけ見せようと、問題を起こしそうな生徒には、積極的に何かをさせようとはしていませんでした。ところが、劇団の方たちはそうした生徒にも、先入観なく認めたり褒めたりして接していました。問題を抱えた生徒も含め、全員に出番を与え、役割を成功させるためにかかわり、そして頑張りをお認めることの大切さに気付かされました」（佐藤校長）

この体験を基に、教師がアイデアを出し合い、検討を重ねながら学校独自の「開発的生徒指導」をつくり上げていったのだ。

高校説明会の運営を 生徒に任せる

最初の重要な実践は、05年度に校内で開いた高校説明会だった。毎年、高校の先生の話聞く際に、生徒の集中力が途切れることが問題となっていた。05年度の計画に当たっ



佐賀市立金泉中学校校長
佐藤 範男
Sato Norio



佐賀市立金泉中学校
研究主任
空閑 宏史
Kuga Hiroshi

School Data

佐賀市立金泉中学校

◎1960（昭和35）年、金立中学校、久保泉中学校の2校が統合して開校。自分自身の良さを自覚させて伸ばしていく「開発的生徒指導」によって、いわゆる「生徒指導困難校」から立ち直った。

校長 中野義文先生

所在地 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉2361-1

TEL 0952-98-1181

URL <http://www3.saga-ed.jp/school/edq10157/>

*プロフィールは取材時（09年3月）のものです

ては、説明会の運営方式に問題がなかったかという観点から内容を検討した。その結果、生徒全員が体育館に集まり高校の説明を聞くという従来の形式ではなく、高校ごとに別々の教室で説明会を開き、興味のある高校を選んで生徒自らが出向く形にした。しかも、生徒自身に実行委員会を組織させ、高校の先生の誘導や司会進行も担当させる、自主運営方式にした。研究主任（当時）の空閑宏史先生は、「生徒は期待以上に頑張りました」と当時を振り返る。

「生徒は自ら改善案を出し、工夫して進行了ました。進路指導主事を中心とした綿密な計画と、十分な練習の成果もあり、説明会は滞りなく終わりました。生徒が説明会の運営をすべて行うのは珍しいようで、高校の先生から高い評価を得ました」もちろん、いきなりこのような実践が可能になったわけではない。空閑先生は「絶対に失敗しないと思えるだけの準備を綿密に行ったことが大きい」と強調する。

「『生徒の自主性に任せる』のは、決して『教職員が手を掛けない』ということではありません。むしろ、

当日の流れのシナリオづくりや、本番を想定した事前の練習などは、例年以上に細かな点まで目を配りながら準備をしました。生徒が『出番』と『役割』をきちんと果たし、『承認』を得て自信を深める。そのためには『本番では絶対に成功する』と思わせるだけの自信を、生徒に付けさせなければなりません。開発的な取り組みは、きめ細かな支援があつて初めて成立するものだと思います」

開発的生徒指導を支える「黄金の一週間」

次に着手したのが「黄金の一週間」（図1）だ。学期始めや行事終了後など、高まった意欲が低下する一週間で大切にしようと、生徒に意識させる活動だ。遅刻・欠席、服装などの生徒指導、教科学習の心構えや授業の受け方など、学習にかかわる内容を重視。期間中は、校内放送や全校朝会で呼び掛け、プリントを配布して、「黄金の一週間」であることを繰り返し伝える。

「一つの出番をやり遂げたら、それで終わりではありません。役割を果たしたことが承認され、次の出番

図1 「黄金の一週間」を行う主な行事

1学期					2学期				3学期		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入学式・始業式	生徒総会	期末考査	中体連大会		2学期始業式 体育大会			文化発表会		3学期始業式 学年末考査	卒業式・修了式 入試(*)

「黄金の一週間」を行う学校行事を示した。他にも、毎月1週間の始めの1週間でも行う。「黄金の一週間」の間は、掲示物の張り替えや学年集会、あいさつ運動なども併せて行い、気持ちを引き締めようという趣旨がある
*高校入試の場合は各自の試験終了後の1週間が該当する

につながつてこそ意味がある。生徒自身にそれまでに積み重ねてきた成果や課題を意識させ、更に意欲を高め、次の『出番・役割・承認』のスパイラルにつなげるのが、『黄金の一週間』のねらいです（空閑先生）
一連の活動で注目すべき点は、「開発的生徒指導」「黄金の一週間」などの学校の方針と取り組みの内容を生徒にも十分に説明し、しっかり認

識させていることだ。

「生徒自身も、この取り組みがどのような内容で、何を目標としているのかを説明できます。中学生であれば、指導の手の内を見せてもよいのではないのでしょうか。集団にかかわる全員が意思を同じくして取り組んだ方が、より良い集団となっていくと思うからです」（佐藤校長）

活動を着実に定着させるため、通知表に「出番・役割・承認」の欄を組み込んだ（図2）。「出番」と「役割」の欄は生徒自身が記入し、「承認」の欄は生徒の「出番」「役割」で頑張ったことを担任が記入する。佐藤校長は、保護者が子どもを認めることが次の役割につながると話す。

「『出番・役割・承認』について、保護者と共に取り組んでもらうための工夫です。三者面談などで親子が一緒に目標を確認し、担任の承認コメントを保護者にもきちんとフィードバックするようにしています」

地域の理解を得るために 市民を対象に学校公開

地域の学校に対する不信感や良くないイメージを少しでもぬぐい去る

うと、地域に対する広報活動にも力を注ぐ。03年度には生徒による年少者への読み聞かせや清掃活動を始め、04年度は学校を紹介する冊子やホームページを作った。佐藤校長自らが地域に出て、直接、住民に理解と協力を訴えることもあった。

06年度には地域住民を対象に学校公開を実施。学校公開と言えば自校を会場にするのが一般的だが、同校は佐賀市の公共施設を会場にし、生徒会の活動発表や公開授業などを行った。学校の目標や課題を、学区内だけでなく、広く市民に知ってもらうとしたのだ。案内や運営は生徒が務め、「頑張る姿をアピール。好評のうちに終了し、地域の理解と協力を得るきっかけになった。

「多くの方から好意的な感想や称賛が寄せられました。これが、生徒への大きな『承認』になりました。地域の学校を見る目は確実に変わり、『荒れた学校』から『地域の誇りの学校』へと意識は少しずつ変化していったようです。積極的にかかわろうとしてくださる方が乗数効果的に増えていきました」(空閑先生)

08年度は、県民ホールを1週間借

りきつて、生徒全員が描いた絵を展示する「絵で見る元気あふれる学校展」を開催。絵の下には、教師や保護者が書いた、展示作品に対して頑張りをたたえるメッセージを添えた。「承認」の大切さについて、地域に発信するという趣旨もあった。

作品の搬入や展示、会期中の受付などは、保護者が担当した。

「保護者への協力依頼時には、活動のねらいをき

ちんと説明しました。『活動が生徒にとってどのような効果があるのか』が理解できれば積極的にかかわってくれます。受付担当の保護者は、来場者に『応援メッセージ』を書いてもらうための説明をいわずにしてくれました」(佐藤校長)

今、取り組む

図2 「出番・役割・承認」の欄を取り入れた通知表

のは、学区の小学校及び地域との連携だ。小学6年生を中学校に招いて行う部活動体験、中学校教師が小学校に出向いて行う出前授業、地域行事への参加などを通して、学区ぐるみで「開発的生徒指導」を展開し、子どもを育てていこうとしている。

「地域全体の活性化には、『地域の子どもはみんなの宝』という意識で育てていかなければなりません。小

中連携を核にしながら、地域や家庭で子どもに『出番』『役割』を与え、『承認』するという流れをつくりたいと考えています」(佐藤校長)

地域と学校の協力によって、子ども自己肯定感を高めていく。かつて「生徒指導困難校」と呼ばれた金泉中学校の取り組みは、高校現場においても参考になるのではないかと。

通知表にも、「出番・役割・承認」の欄を設けた。担任や保護者と共に、めりはりのある生活を送るための工夫だ。保護者に配布する資料で、上図のように成績表の各項目のねらいと内容を説明し、学校の教育方針への理解を求めている

閉塞感を打破する主体性は教師にも必要

9月号の特集で、福岡県立城南高校のドリカムプランについて改めて読んだ。「自律」の上に「自立」がある。生活指導も含めて、進路指導があるのだと痛感した。「先が見えない閉塞感」を感じているのは、高校生に限らず、教師を含めた社会人も同様だ。本来、閉塞感を打破するためには主体的な行動が必要だが、つい受け身がちになってしまふ。つまり、生徒を主体的にしていくことも難しい課題なのだ。まずは、教師である自分自身が変わる・変えていくことが重要だと感じた。「宮城県・常盤木学園・高谷将宏」

生徒が柔軟に将来を見定められるような指導を目指したい

9月号の特集で、埼玉県立不動岡高校の久保島先生の「なりたいたい自分だけを追求しても成長はない」という言葉に共感した。最近、「自分は○○になる」という固定観念で凝り固まっている生徒が多い。しかし、今まで受け持った生徒を思い返してみると、こだわり過ぎず、よい意味で柔軟に自分の将来を見定めていた生徒が、充実した人生を送っているように思う。時代や社会に合わせて変化する自分を認めるような指導が重要なかもしれない。

〔新潟県立新発田高校・江川真〕

信念を持った改革に勇気をもとう

9月号の「指導変革の軌跡」で、静岡県立静岡高校の数学科の先生方の勇気と行動力に力付けられた。一教科が突出することに對し、非難や反対の声は少なくなかったと推察する。それ

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 4

教育最前線からのホットな話題を紹介します

でも信念を持って取り組みを推進した様子に、我々も頑張らなければと勇気をもらった。満点答案の作成など、模試の徹底利用をしている点や、進路対策会議を隔週で開いている点も大いに参考になった。ぜひ、本校でも取り組みたい。

〔滋賀県立守山中学校高校・堀浩司〕

理系と文系の横断的な研究内容が新鮮

「未来をつくる大学の研究室」は進路指導の参考にもなり、楽しみにしているコーナーの一つだ。特に、理系と文系の横断的な研究であることが分かる構成は新鮮な視点であり、今後も続けてほしい。更に、9月号の帯広畜産大・嘉糠洋陸教授の「負荷なくして成長なし」という言葉は、進路指導にもつながるメッセージだと感じた。

〔長崎県・匿名希望〕

30代教師の生徒中心の視点に共感

9月号の「30代教師の情熱」の記事では、進路指導は生徒中心であるという視点を改めて示していた。当たり前のことだが、指摘を受けて再認識させられたように思う。進路指導の原点に戻り、生徒の興味や関心を基にした指導をすることで、苦しい時に乗り切れるようなパワーを引き出せるのだと思った。

〔福岡県立青豊高校・上森哲生〕

教師川柳

叱るたび自ら痛みを知る人に

長野県・一徹

「VIEW21」へのご意見・ご感想を Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

- ① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。
- ② 画面右端の「VIEW 21」の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。
- ③ 入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

<http://benesse.jp/berd/>



編集後記

「100点満点の納得いく授業なんて出来たことはありません」。「30代教師の情熱」のコーナーにご登場いただいた市川先生の言葉です。常に足りないものは何かを振り返る謙虚さが自分を伸ばしていくのだと、改めて学びました。減点があるということは伸びる可能性があるということなのだ、背中を押された思いがしました。(佐藤)

VIEW21 10月号 Vol.4

2009年10月26日発行

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
 印刷製本 大日本印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 中丸満
 撮影協力 川上一生、谷口哲

お問い合わせ先
 VIEW21編集部
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー22階
 電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009

VIEW21

2009
 December
 12月
 Volume 5

次号は
 11月30日発行(予定)
 「VIEW21」高校版は
 年6回の発行です